郷友

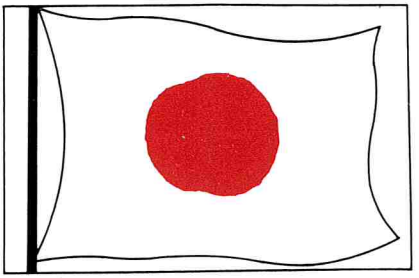
第三十六巻第二号
（通巻四二〇号）

平成二年
2月号

1990
February

—自然美散策（常照皇寺冬景）—（解説表２下段）

内、外状勢の的確な把握を



表紙写真の解説

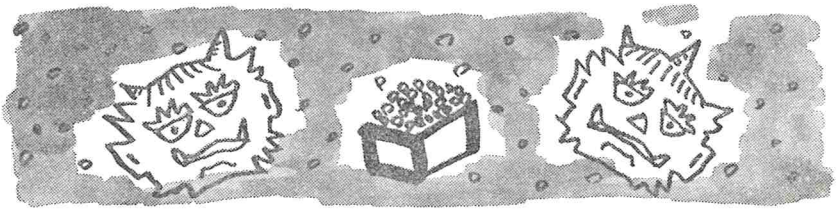
写真家　宝蔵寺　忠

――自然美散策（常照皇寺冬景）――

――京都府北桑田郡京北町井戸――

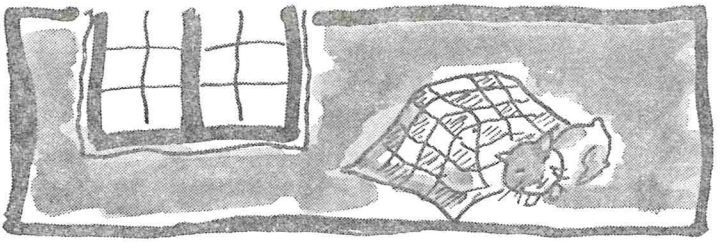
南北朝の時代、北朝初代の光厳天皇が建武の中興により廃帝となり出家の後、各地を巡錫され貞治元年（一三六二）此の地に草庵を営まれたのが常照皇寺の起りである。帝は毎日ひたすら禅三昧の日々をおくられ、三年後の貞治三年（一三六四）七月、悲運と数奇な運命のもとに、五十二才で入寂され「骨はひそかに裏山に埋めよ、さすれば……」との御遺言により、寺の背後の丘陵に葬られた山国陵がある。広い境内はうっそうと茂る杉・檜の樹林にかこまれ、方丈・庫裡・書院・仏殿（開山堂）・舎利殿・勅使門などが山すそにひっそりと建ちならんでいる。建物はすべて江戸時代末期の建立だが、創建当初の様式をよく伝えている。当山は京都市の北西に位置する京北町にある。町域は大堰（おおい）川（上桂川）とその支流弓削（ゆげ）川の源流地にあたり、標高六〇〇～七〇〇メートルの丹波高原の中心をなし、冬の厳しさは相当なものである。主産業は林業で、杉・松・檜などの良質の建築用材をふるくから産し、平安京建設の用材の殆どを出したといわれている。京北町の中心は周山というが、京都を望む要害の地周山城があり、もとは縄野といったが、天正七年（一五七九）明智光秀によって城が築かれ、光秀は自らを周の武王になぞらえて周山と改めたという。

郷友目次（2月号）



巻頭言……堀江　正夫（2）
対談・デタントと日本の防衛……山下　元利（3）
講演要旨・「安全保障を考える」（二）……衛藤　瀋吉（5）
ソ連の軍事的脅威は存在する……小谷豪治郎（10）
郷友オピニオン（近藤伝六・岩政寛隆・佐野幹雄）……（14）
また迎える波乱の歳……斎藤　忠（17）
軍事常識—予備兵力と動員制度……五十嵐　晃（21）
随想・失われた商業道徳を嘆く（二）……大塚　道廣（23）
戦いの九原則（その8）……武岡　淳彦（28）
祖国日本に愛と誇りを持つ子を育てる（その7）……多田三重子（32）
現代に見る間接侵略・革命（二十）……狩野　信行（36）
韓国研修旅行に参加して……三田　進平（40）
郷土の城（30）……佐々木信四郎（45）
郷友基金醵金者ご芳名（新・8回目）・本部だより……（49）
二月のお料理……堀江　泰子（50）
新隊員の一日（125）（え・柏木康武）……牧野　良祥（51）
戦史物語—興津坐源荘の警備（一）……森松　俊夫（52）
地方だより（熊本・和歌山・富山・山梨）……（55）
本部業務分担表……（58）
俳壇・歌壇・柳壇……（60）
編集後記……（68）

巻頭言



日本人としての自信と誇りを取り戻そう

会長　堀江正夫

最近「日本人よありがとう」という、マレーシアのノンチック氏の半生記を綴った本を読んだが、その冒頭に載せられたノンチック氏の詩の中で、氏は戦争中から戦後に至る日本人観を鋭くかつ卒直に述べている。

たしかに戦後の日本人は変った。勿論政治・経済・教育・社会情勢等の大きな変化が齎らした所産ではあるが、一つには過去の日本の政策や日本人の行為に対する罪悪感が、その自信や誇りを喪失し、日本人を変えた大きな原因の一つかとも思われる。そこでこれに就て私自身の細やかな体験を述べてみたい。

まず兎角批判の的となっている、かつての領域統治に対するその国民の受止め方である。

私が再々訪れる中華民国台湾では、今日の繁栄が、日本の行った教育及び農業政策のお蔭であると明言する人は決して少なくないし、南洋庁のあったパラオでは、日系の二世だけでなく三世も四世も日本名を正式に名乗り、空港ビルにはかつての神社の大きな写真が掲げられ、戦後は食糧を含み総て輸入であるが、戦前は二万名が自活できる田畑を日本が作ってくれたと、今日なお日本の統治を高く評価し、日本に深い親近感を寄せている。

次に、私がかつて戦ったパプア、ニューギニヤの人達の日本人観である。

この国は、日米濠軍等により熾烈な戦火の巷となり、原始的ではあるが平和な生活が徹底的に破壊され、多くの犠牲を強いられたのであるが、戦後濠州の力により近代化し独立できた今日も、この国の人々は、濠州人は友人であるが日本人はわれわれの兄弟であると言い、絶大な信頼感を持ち続けているのである。それは日本人が終始彼等を対等の人間として接しかつ遇したからである。（※以下P・9下段に続く）

対談

デタントと日本の防衛

――極東ソ運軍の脅威は不変――

（自衛力の整備こそ命――山下代議士
心したい〝油断大敵〟――加藤さん）

語り手
衆議院議員
元防衛庁長官
山下元利先生

聞き手
日本テレビ
アナウンサー
加藤明美さん

米ソを軸に世界はいま緊張緩和（デタント）の流れにありますが、膨大な核兵器と通常戦力を保有して、東西両陣営が向き合っている基本的な構図は変わっていません。今日はこれら世界情報の中で、日本の防衛はいかにあるべきかについて語っていただきました。お相手は加藤明美さんです。

★

加藤　近年、東西間には対話を含め歓迎すべきムードが見受けられるのですが、日本としては、これらの動きをどう認識すればよいのか、いかがでしょう。

山下　確かにこのところ、緊張緩和のムードが漂っています。

過去一年間の国際軍事情勢の主な流れをみましても、例えば昨年七月のＩＮＦ（中距離核戦力）の廃棄開始、十二月のゴルバチョフ・ソ連書記長の五〇万人兵力削減計画の発表、今年三月の欧州通常戦力交渉の開始、五月の中ソ和解など、軍縮の動きやソ連による平和攻勢の動きが際立っています。

しかし、ソ連は経済、民族などの国内的難問をいくつも抱え、国防へのウエイトを減らさざるを得ない事情があること。また、対外猜疑心、力の信奉観、膨張主義などといった、この国の特質が簡単に変わるかどうかということです。

加藤　そういえば、ソ連という国は弱い者には強く、強い国とはことを構えないなどといった歴史を持っていると伺ったことがありました。

日本にかかわりの深い極東ソ連軍などの動きはどうなっているのでしょうか。

山下　ソ連は一九六〇年代に激化した中ソ対立を契機に、極東地域で一貫して質量両面にわたって軍事力を増強しました。そして、今日では核戦力、通常戦力ともソ連全体の四分の一から三分の一に相当する戦力を保有しているのです。

また、極東ソ連軍は沿海地域、樺太、オホーツク海、カムチャッカ半島などわが国に近接した地域に重点的に配備しています。つまり、極東ソ連軍の地上・航空戦力全体のうち、師団の約六割、戦闘機の約六割、爆撃機の約八割が配備されているのです。

加えて、ソ連最大の艦隊である太平洋艦隊がウラジオストクを主要拠点にして展開しています。

次に、指呼の間にある北方領土のソ連軍ですが、わが国固有の北方領土を未だにおさえているということは、戦略的観点からなんです。ソ連は国後・択捉両島と色丹島に七八年以来、地上軍部隊を再配備し、現在は師団規模と推定され、わが国に対する潜在的脅威となっているのです。

加藤　油断もすきもありませんね。中国はともかくとして、朝鮮半島の軍事情勢はいかがでしょう。

山下　南北対話の動きは見られますが、今なお韓国と北朝鮮は三八度線をはさんで、両軍あわせて約一二〇万人を超える地上軍が対決姿勢を崩していません。

北朝鮮の一九七〇年代以降における軍事力の増強には著しいものがあり、韓国では深刻な脅威と受けとめ、並々ならぬ国防努力を払っています。

そして、韓国には米軍が駐留し、朝鮮半島での軍事的バランスを図り、大規模な武力紛争の発生を抑止し、ひいては北東アジアの平和と安定に寄与しているのです。

加藤　他国からの侵略を未然に抑止するための不断の努力は、常に要請されるわけですね。

山下　ご説の通りです。このところ米国は財政赤字を背景に、国防予算は減少していますが、安定した国防努力を進め、同盟国に対しては共同防衛のための負担の公正な分担を求めているのです。油断は禁物です。

ソ連のペレストロイカの推進や一方的軍事力削減表明など「新思考外交」には評価すべきものがありますが、現実のソ連の兵力配備などからしても、西側諸国との結束や日米安保条約の強化、そしてGNP一%枠の精神を尊重した「専守防衛」のための日本の防衛力整備は、ゆるがせには出来ません。

（朋山より転載）

講演要旨

安全保障を考える（二）

――安全保障は人に在り――

衛藤瀋吉
（亜細亜大学・日本経済短期大学学長）

それから自衛隊が活躍しているのを見ると、自衛隊があっても良いのではないかという感情が出てくる。ベレンコ中尉亡命事件が起きると、自衛隊は何しているんだと、より精密な防空能力を要求する。これは、アムビバレンス、反対の感情が一人の人間の中に存在するということで、屢々あることです。

国際関係論を担当している私は、国際関係の厳しさや冷たさを、一生懸命に教えることによって、子供の時から教わって来た自衛隊違憲論とのバランスをつけようと考えました。これが、私の東大三十年間の大変大事な発想だったのです。そして、それは、今も同じ考え方ですが、そうだとすると、皆様方は国際社会の現実をよくご存じで、戦力が必要だと信じ込んでおられる方々ですから、私とともに憲法改正論者でなければならないと思います。それを政府与党が繰り返し口先だけでこじつけ、攻撃兵器は憲法違反である、ＩＣＢＭは違憲であるが、必要最小限の防禦兵器はよろしいという、それなら必要だと思ったら防禦的な核兵器ＡＢＭも、憲法違反でないことになる、そういうゴマカシをすればする程、若い兵隊達はサラリーマン根性になります。それから、非核三原則というのがあります。私はマヤカシだと思います。亡くなられた佐藤栄作さんが非核三原則と言われたときに、そうあって欲しいという所でお止めになった方がよい、非核三原則をあくまでも忠実に守ろうとしたら守れませんよ、と申し上げました。これもコジツケでごまかしている。その時、考えたのが役人でしょうね、日米両国政府は、信頼関係にある、その信頼関係に

ある米国政府が重要な装備の変更として通告して来ないのだから、核兵器が搭載されていないと推定する、そんな馬鹿な、いちいち横須賀に入港する空母が、核兵器を何処かに置いて入って来ますか、核兵器は、何処にあるのか所在が判らんところに意味がある、そんな馬鹿なことを一生懸命、外務省の役人は言って居る。心の中では「馬鹿な話ですよ、判っていてもそう言わなければならないんですよ」と自らを嘲笑しながら、新聞記者の前でそう言っている。日米関係が友好関係にあるから嘘をつく筈がない、と言う、友好関係にあるから嘘をつかない政府がありますか。皆様方は大人だから良い。皆様方が十八、九歳の時を考えて見れば、もっと直情径行だったでしょう、直情径行でしかも頭が悪くないのですから、これはマヤカシだと判る筈です。判るとヒドイことだと言うことになる。一九六〇年半ばごろまでは、学生運動の盛り上がった中で、直情径行さと直接的な解釈が、反自衛隊運動の理論的な根拠となっていたのですが、それが、一九七〇年代になって学生運動が白けて来ると急速にどの政党も支持しないという層が増えて来ます。西欧民主主義の社会で若者が政治に無関心になるとは、これは残念なことです。

二十歳位までは、正義心で突っ走るという位で丁度良い。若い青年諸君の正義心に訴えられるような自衛隊でなければ意味がないと思います。

そこで自分の職業が憲法に合って居る、国のためになるという確信が持てるようにすることが、自民党の防衛に対する責務であります。予算を増加することではない、予算なんか減らしてもよろしい。それから、退職された方々は、今や自由なのですから、強く筋を通して頂きたい。そうでないと、国民感情に反するような存在の自衛隊では、うまくいくはずがない。自衛隊は全く金喰い虫で、矢張り昔の陸軍のように、強くなるとつい外へ出て行きたがる、危険だ、だから自衛隊は無い方が安全です、と言われるのです。

皆様方の御顔を拝見していても、観光旅行で外へ出て行く方は沢山おられるでしょうが、軍を率いて攻め込もうなんていうお顔じゃない。だから、その意味では戦後の平和主義は定着したと思います。その平和主義と、新しい国を守る情熱とを何処でバランスさせて行くか。それが皆様の課題です。

戦力というものを総合安全保障力の中で、強い支柱として作り上げて行くには、この問題を解決すべきだと思います。かえりみると昔の陸軍はヒドイことをしたものだと思います。スッカリ軍隊に対する国民の信用を失ってしまった。そして、それを更に左翼の人たちが、そういう国民感

情を利用して反自衛隊感情を扇動して来た面があると思います。しかし、その困難な現実に向かって我々が立ち向かわねばいかんのではないかと、またその時期が来たのではないかと思います。今日はそれを訴えさせて頂きに参った訳で御座います。さっき陸軍と申しましたが、昭和十七年頃から海軍も同罪で御座います。海軍が、ミッドウェイ以後、敗戦をいかにヒタ隠しに隠したことが、どれだけ軍の信用を失わせたか、これは想像を絶するものがあります。

日露戦争の時をお考えください。佐渡丸が沈んだ、常陸丸が沈んだ、チャンと発表しています。発表したから、対馬海峡防衛を担当していた艦隊の司令長官上村彦之丞中将の家には石コロが一杯投げられて、御家族は買い物にも行けない状況だったのです。そして、それを気の毒に思った旧制一高の生徒達が上村中将の歌をつくって愛唱し、民衆からヒドく苦しめられた中将をカバッたのでしょう。そういう仕組みをドウして太平洋戦争の時、軍はしなかったのか、今から思うと残念です。海軍だけでもヒドくなければ、まだ救いがあったけれども、海軍もヒドかったのです。だから、軍は救いようがないのです。その重荷を皆様方は背負っておられる。私も皆様ほどでないにしても、自分で正しいと思うことを言おうと思うと重荷がズシリと来ます。その辺をドウいう風にしていったら良いか、私は私なりに構想を描いています。

第一に、我々は、自衛隊が憲法違反であることを、ハッキリ認めるべきだと思います。認める人が増えて、サア自衛隊をつぶしますか、とこういう風に国民に訴えれば、つぶすわけには行かない、という人たちがキット増えると思います。社会党の中にも増えます。そこで初めて自衛隊は、憲法違反だ、その自衛隊をつぶすか否かで、マスコミの中でも社会党の中でも空理空論ではないズシリと重みのある論争が起こるでしょう。その時に、もう一人ベレンコ中尉のような面白いのがいて、戦闘機で亡命でもしてくれれば、国民の世論は、これは大変だということになります。ついでに、ソ連の潜水艦が三陸沖の海岸か何処かに遭難して浮上し、中に核兵器でもあったということにでもなれば、国民世論は一遍に自衛隊は存続すべきである、憲法は改正すべきであろうという方向に行くであろうと思います。もちろんこれは冗談です。現実には、そういう事件を頼りにしてはおれませんので、地道に努力して、我々の声でも次々と繰り返して声をあげる。防衛庁長官も公然と今の自衛隊の憲法上の地位は不安定だ、とオッシャルならば、恐らくマスコミは叩くでしょうが自衛隊の士気は上がると思います。

そのために、マスコミから叩かれてもいいではありませ

んか。新聞からいくら叩かれても、自民党代議士諸公の選挙区はビクともしないですよ。かつて石原慎太郎さんは核装備論をブッタでしょう。私は核武装反対ですから、石原さんに随分激論をしたいと迫られました。しかし、それで石原さんは、票を失ったことはない。今でもタカ派で頑張っておられる。この頃は流石に核武装論は言われなくなりましたが、核兵器を持つのは国家の威信みたいなものであるというのです。私は不必要な武器は持たないほうがよいと言っても、中々ご理解頂けなかったものです。その石原さん一つ見ても、私は、代議士、特に防衛庁長官は、御自分の考えをおっしゃるべきだと思います。そこで注意しなければならないことは、憲法に対して批判することと現行憲法を守ることとは完全に区別することが大切です。憲法が、自分の意にそぐわないから守らないというのはいけない。それは法律でも同じです。私は外国で車を運転することがありますので、右側通行は大賛成です。右側通行論者です。日本は右側通行にしないので青年海外協力隊の人で外国に行って事故を起こす人があるのです。しかし、現行の左側通行を守ることとは峻別しております。

憲法を守ることと、憲法を批判することは区別しなければなりません。或憲法記念日のシンポジウムに出たことがあります。ある左翼の生先が、憲法に元首の規定がないのはケシカランと言うのです。第九条については、憲法を守れと大声で言い続けてきた人なので、私はさっそくそれを受けて、「今日の憲法は軟らかい憲法です。改正を期待しているのです。万古不磨の大典であった明治憲法とは違うのです。いまの憲法は米軍が作ったものです。色々不合理な所がある、それを変えて行くのも次の世代に対する我々の努力の必要なところではないかと思います。今の憲法は学者が言う程、理路整然たるものではありません。不合理な所が多い。憲法を守る会とか憲法を尊重する集りと言ってばかりいるのは、左翼や進歩的な方で、もう時代遅れになりました」と発言したのです。憲法改正を前提にして憲法を考え、現行憲法の何処に不合理があるかということを勉強する方向に、右も左も行かなければいけない。左も行きつつあるのですから、私達も行かなければいけないと思います。それなら、憲法第九条も改正するという方向に持って行くこともできます。

国の安全保障は装備によって決まるものではありません、下関・馬関戦争では確かに装備の劣った長州藩の兵が敗れたのですが、しかし、敵前上陸をあえてするだけの水兵の訓練が四箇国連合軍の方にはあったということを忘れてはいけないと思います。

敵前上陸というのは非常にやりにくいものです。兵隊が

本気で戦う気でなければ、できません。それが四箇国連合軍にはあったのです。それは国民兵だったからです。士気を高めるためには、単に糧食費を増したり、或いは皆様方が部下に精神訓話をなさったり、私の話を聞かせたりしてもダメだと思うのです。

自分は正しい職業についているのだ、そして国民から敬愛されているのだという自信、これがなければいかんのではないかと思います。その点は、昭和の初めまでの日本の軍隊は大したものだと思います。自分達が国民に支持されていると思うからこそ、青年将校達は確信をもって、行動したのです。政治に介入したことは良くなかったけれども、彼らが、それ程、自分達が国を守らなくて誰がやるかという確信と情熱を持ち得たこと、これは皆様方忘れてはいけないと思います。彼らは行き過ぎだ。しかし今自衛隊に欠けているものはそれだと思います。

国民感情と離れないで、しかも国民感情を次第に動かしていく。そして、自衛隊の士気を鼓舞する。そうすれば、装備など少し弱くても志操堅固志気高揚した確信ある軍隊に仕立てられると思います。　（以下省略）

（本文は、平成元年五月十六日、グランド・ヒル市ケ谷において、当会総会において実施された講演の要約で、文責は研究班にあります。）

※P・2巻頭言続き。

この際われわれの真の体験を若い人達に積極的に知らせることを考えたらどうか。これもわれわれの責務ではないかと思う昨今である。

自衛官募集

男子自衛官

二等 陸・海・空士

○年令　一八才以上～二十五才未満

○初任給　一二一、〇〇〇円
（食事、宿舎費は無料）
（寝具等は支給又は貸与）

○ボーナス　年三回、四・九ケ月分

○技術　各種国家技術免許取得の機会があります。

お問い合わせ

東京地方連絡部電話〇三(二六八)三一一一
又は、各都道府県所在の地方連絡部へ

ソ連の軍事的脅威は存在する

小谷豪治郎
（京都外国語大学教授）

筆者は防衛問題について、永年にわたって、深い関心を抱いてきた者の一人である。その意味では積極的に、日本の防衛政策に色々な角度から言及してきた過去を持っている。しかし、最近では新進気鋭の論者の輩出の陰に埋没して、殆どこの問題に関して意見を世に問うこともなかった。その意味では、自ら自覚している通り、筆者が最早忘れられた存在となっていることは事実である。

しかし、最近送られてきた「経済復興」誌の十月上旬号の「時代認識を誤っている〝防衛白書〟」と題する岩島久夫教授の評論を読んで、いささか感ずることがあったので、筆者なりの意見を開陳しておきたい。日本経済復興協会の理事や評議員の中には、優れた軍事的知識の所有者が何人もいらっしゃるので、差し出がましいことになるやも知れないので、別のテーマを選ぼうかとも考えたが、結局お許しを願って一文を草してみた。

端的にいって、同教授は「とにかく、〝ソ連の軍事的脅威〟などは全然存在しない」と断定しておられることについて、先ず疑問を抱かざるを得なかったのである。勿論、ある時点で、ある状況のもとで、軍事的脅威が存在するかしないかという問題には、極めて主観的なアプローチができる。従って、同教授のこの断定に対して筆者が疑問を抱くことも亦、極めて主観的であることを免れない。とするならば、その断定に対する反対をここで開陳してみても、殆ど意味がないし、そのような論争を試みる積もりは毛頭ない。

ゴルバチョフ・ソ連最高会議議長の推進するペレストロイカが成功するか、不成功に終わるかの判断の問題は別として、現在のような状態が一応続くとして、同教授は「と

にかく〝ソ連は変わった〟のである——良きにつけあしきにつけ」という判断を下し、それに加えてソ連の「新思考」外交によって、安全保障環境を安定させることへの努力と、「軍事政策」上の新しい方針とが、〝ソ連の軍事的脅威〟などは全然存在しないという結論を導きだしたと考えていい。ここで問題にしたいのは、第一に、その安全保障環境を安定させる努力が実らなかったときに、そしてまたその軍事政策上の新しい方針が変化した場合でも、その脅威は依然として存在しないのかどうかということである。そして第二に、少なくとも、岩島教授の所説は、筆者の理解では、ソ連が安全保障環境を安定させる努力を続ける限り、そしてまた「十分性の原則」を変えない限り、〝ソ連の軍事的脅威〟は存在しないと決めているかのように写るのだが、どうであろうか。

このように考える前提として、既に指摘したようにペレストロイカの成功・不成功の問題は一応棚上げするという仮定、そして現在のような（ソ連に見られる不安定な）状態が一応続くという仮定を設けているのだが、これら二つの仮定そのものは、同教授自身も書かれたこの文章を拝読する限り、不安定な仮定であることを認めておられると考えていいように思われる。とするならば、これら不安定な仮定に少しでも好ましからざる変化が生じた場合、厳密な意味では、軍事的脅威はその姿を表し始めるのではないだろうか。その場合の軍事的脅威というのは、現在軍事的脅威などは全然存在しないと考えている立場の人、即ち同教授の様な人にとって脅威という意味である。

なぜならば、現在の様な状態でも、それこそ主観的な理解の域を出ないといわれるであろうが、筆者のようにソ連の軍事的脅威を感じているものにとっては、その場合の仮定に関する変化は何ら変化らしい変化とは考えないからである。

ところで、岩島教授はソ連が新しいドクトリンによって「新防衛線」を自国周縁にずっと引き下げて「最適」の軍事力造成を図ることになり、「域内」行動が強化されてきたことを指摘しておられるし（傍線は筆者がつけたものである）、同時に「日本の安全保障上放っておけない地域がソ連の新防衛線の内側にある」ことを指摘しておられるし、それ故に「日本周縁では相変わらず活発なソ連の軍事的動きが観察される」と書いておられる（但し、観察されると書いておられるが、脅威とは書かれていない）。これは極めて客観的な描写であり、ヨーロッパと日本とのソ連の脅威に関する「空気」の違いの一つの大きな原因であることは明らかである。にも拘らず、副題として書かれているように、〝ソ連の脅威〟など存在しない、という結論を

掲げておられるのは、どのように理解したらいいのであろうか。少なくとも、「域内」での行動が、それでは何故強化されなければならないのであるかについて、納得のゆく説明がされない限り、単なる観察の対象としてのみ理解することは、いささか不自然ではないであろうか。

最近、東京でおこなわれた第十九回日米安保事務レベル協議では、「ソ連軍の脅威は変わっていない」という認識で一致したと伝えられているし、ローウェン国防次官補は「ソ連軍の質の大幅な改善によって相殺されていることを見逃すわけにはいかない」と発言しているし、ハーディスティ太平洋軍司令官は「西側が警戒を緩める時期ではない」と述べていることから考えても、グローバルな観点から米ソの軍事情勢を理解できる立場の人達の判断は、ソ連に対する軍事的脅威を意識していることは間違いない。

これに関連して、指摘しておきたいのは、日本の安全保障政策に直接関わり合う立場から考えて見た場合、ソ連の「域内」に日本の安全保障上放っておけない地域が包摂されている以上、ソ連がとる「十分性の原則」にどのように対応したとき、軍事的バランスは均衡し、ひいては軍事的脅威を感じなくて済むかと言う問題は依然として残る。すくなくともソ連がその域内で「十分性の原則」を持って軍事的に「最適」のものを「造成」している場合、日本はどのような原則で、どのような程度の軍事力を持てば、脅威を感じなくて済むかは、当然検討しなければならない。日本の場合は少なくとも「専守防衛」という原則があり、その原則に相応しい十分な軍事力の造成が望ましいが、その造成が不十分であるならば、必然的にソ連軍を軍事的脅威と感ずる事になる。その意味では、相手の原則や軍事力の内容だけで、脅威かどうかを云々することは間違っていることになる。

必要な手順としては、日本の軍事力がどのような受け止め方をされるかも、当然考量されなければならない。その場合、具体的に言うならば、ソ連の造成している軍事力に対抗してどれだけの「継戦能力」が日本にあるかが、その判断基準にならなければならないし、単にGNPとの比率で計算されるべき性質のものではない。従って、「一%枠」というものに縛られることは、理論的には間違いである。今回の安保事務レベル協議における対話では、少なくとも米国側からこの「継戦能力」の向上を求められている事を知っておかなければならない。勿論、その場合日本には、米国との安保条約の存在を計算の基礎におくことはいうまでもないが、そのためには米軍との相互運用性（インタオペラビリティ）が確保されなければならないことはいうまでもない。

その場合、十分注意しなければならないのは、公表されただけで実際にはどのように具体化するか判らない、ソ連の軍事力の量的削減に惑わされて、その質的向上を見逃してはならないということである。岩島教授が出席された国際戦略研究所の年次大会の主題は「ソ連における変化の戦略的意味合い」であったそうだが、「ソ連は変わった」ということから、公表された軍事力の量的削減がその質的向上へと繋がる点を見逃す程、この研究所は素人の集まりではない筈である。筆者も度々ソ連を訪問しているので、「ソ連は変わった」という印象をもってはいるが、同時にソ連の変わらない部分を見逃す程、対ソ認識に甘くはない積もりである。現に十月五日にこの研究所は例年のように「軍事バランス八九～九〇年版」を発表したが、東西両陣営は核兵器・通常兵器ともに近代化をすすめており、軍事的にはほぼ均衡していると指摘している。それに日本海で秘密の大演習をソ連とおこなった北朝鮮の兵力が、初めて百万人を突破したと報じている。極東の軍事的脅威の実態は、ヨーロッパのそれとは内容的に同じではないのである。

考えてみれば、日本は米ソの軍事力増強競争とは関係なく、一歩一歩その防衛力を造成してきたのであって、その意味からしても米ソの軍縮競争に巻き込まれることがあってはならない。それどころか、自由世界の一員としての責任分担という役割を、今後日本は果たしてゆかなければならない。少なくともアジア・太平洋地区における安定した安全保障環境の育成こそは、今後の日本が担わなければならない重要な責務である。そのためには、正確にソ連の軍事的脅威を把握し、警戒心を緩めてはならないと考えている。

グローバルな安全保障的環境の崩壊に繋がる恐れのある因子を無くすために、国際連合の持つ平和維持機能の拡充に、積極的に寄与する気運が日本国内にも生まれつつある。この問題は自衛隊の海外派遣問題として、筆者が嘗て防衛研究所に十数年間勤務していた頃の研究課題でもあった。それが漸く今日、民社党々首の国会での発言が契機となって、政府もどうやら重い腰を上げようとしている。遅きに失した感が無いわけではないが、此の問題に積極的に取り組むことによって、日本が局地的な紛争の解決と国際的な平和の維持に寄与し、グローバルな安全保障環境の造成に力を発揮することを切に望みたい。

（経済復興誌十月下旬号より転載）

郷友オピニオン

本覚坊遺文「千利久」

近藤伝六
（愛知県支部会長）

千利久の切腹は井上靖が書き、熊井啓が監督し映画化した。そして89年度ヴェネツイア国際映画紫銀獅子賞を受賞した。「おしん」同様、世界の人々は伸び行く日本の根底にある日本の本質とは何かと注目して拡まって行くであろう。

そこで日本人も日本の本質を見極めて、本当のことが本当で通らないおかしな日本を本物に造り直して行かなくてはならない。

そもそも、山上宗二を先頭に千利久、古田織部たちが戦国部将のように、秀吉の天下人としての権力、黄金の華やかさに抗してわび、さびの茶の道とは、かくの如しといさぎよく腹を切って死んで行く。

わび、さびの極地は床に「無」の軸を掛けてもそれは残る。「死」に到れば桜の花の散る美しさの如く道として心にうつたえるものとなり、それが茶道の神髄であると教えるのである。

妙喜庵の茶席は二畳で、そのにじり口はいかなる権力者も帯刀は許されないし、頭を下げて通らなければ入れない。客と亭主が膝を交えて語り合えば、利久はその道の達人である。憤懣やるかたない天下人秀吉が「死をたもう」ということとなったのではないかと、その弟子本覚坊はその遺文に書きつらねている。

熊井監督の一年先輩達は神風特別攻撃隊として、今次大戦の終りを飾った。それをまのあたりに体験した熊井達が日本人の心の美しさ、その気迫のすさまじさを茶の湯人（びと）たちに表現したとも云っている。

話は飛躍して恐縮だが、リクルートで失敗した自民党の人々が、水玉の美を心情とし、土、日は必ず妻の下に帰る海部さんを押して熊勢を挽回しようというのも、日本人の美しい心に訴えようとする日本人本質の現れでもある。幸い防衛を支える会で総選挙支援の運動を展開される由郷土

の名誉の為是非お願いしたいことである。

《毒舌》世相瞥見　納税か奴隷か

岩政寛隆
（山口県支部
通津郷友会名誉会長）

国家の経綸に金のかかることは何人も承知するところだが、なろうことなら他人の負担で済まそうとするのが国民多数の本音ではあるまいか……討論会や街頭録音では奇麗口を叩くが本音はどうもその様だ……。

消費税は弱い者苛めだ!! と叫び、主食に迄税をかけるのは可笑しい!! と主張し……財布から取り出す金は眼に見え手で触るので吝り、消費税は無謀課税と毒ずくが……所得税他減税分については黙視して一言もない……。又弱い者に対する社会福祉の充足はこれから切り離して無関連の当然事として消費税を悪税と毒ずく、殊に一部の主婦達の近視は盲目に近く目に余る……俺に似よ!! 俺に似よ!! の泥蜂寓話ではないが社会党委員長土井さんの感化か……。

国家の経綸に必要な経費捻出には大別して二つの道がある。その一つは、国家社会を各人の自由な経済活動に任せ、その各人か得た利潤を徴税する法……。いま一つは凡ての企業を国家が掌握、管理し、国民は企業生産手段の一労働者と捉え、国家が得た企業利潤で国費を賄うと共に国民を統制してその管理下に置く……。前者が自由主義国家で我が国の外英・米・仏・西独等がこれに属し、後者が共産主義移行の道程に在る社会主義国でその代表はソ連邦である。

「税金は成るべく納めたくないが、国家企業の奴隷になるのも真っ平だ」今!! 国民はこう云っています……。

海部さん!! 土井さん!! これをどう裁きどう導いて行きますか……。

（元・10・11）

今、郷友運動に求めるもの

佐野幹雄
（熊本県支部理事長）

平和で、成塾した世代の幕明けを願って始った平成の時代も、年頭から、昭和天皇の諒闇の中を、リクルート疑惑と消費税問題その他次元の低い政争に終始し、多年政権を

担当した自民党が、その金権体質と派閥抗等、加えて心なきオバタリアンと一部マスコミの扇動に躍らされて惨敗し、政局は、戦後最大の危局に頻した。

一方、世界は、共産理念による支配構造が、自由と自決を求める国民の本能的要求と、経済の破綻、加えて、ゴルバチョフのペレストロイカ政策を逆用すること等、により、ポーランドをはじめ、バルト三国、ハンガリー、チェコ等の体制改革は、東欧全域に及び、終に東側陣営の堅塁を誇った東独のベルリンの壁も破られ、今や怒濤の勢いで崩れ始めている。又隣国の中国も、天安門の血の断圧で完全に世界に信を失った。更に、戦後四十年余に亘り、その絶大な力を背景に、世界を二分し、領導して来た米ソ両国が、経済力の低下と軍事情勢の変化、その他、イデオロギーに内在する矛盾が顕在化し、昨年末に、嵐の中で行ったマルタ沖の会談では、なりふり構まわず、ヤルタ体制の崩壊に備えての世界新秩序の再構築を模索するに至った。正に世界は、戦後最大の転機を迎えたと云っても過言ではあるまい。

本年は、九〇年代の初年であり、わが国にとっても紀元二六五〇年の節目の年でもある。今、年頭に当り、半世紀の世界の情勢の推移を顧るとき、その余りにも似た世の輪廻を思はざるを得ない。ただ異るのは当時の自存自衛、東亜解放の旗印しの下に、乏しい乍らも活力に満ちた時代と、詐りの平和に溺れ偸安の夢を貪る亡国我利の徒多きの差である。ここで、戦後一貫して、今日あるを予期して、凡ゆる苦難に堪え、悪条件の中を進めて来た郷友運動の出番がやって来た。

本会が昨年、この世相の変化に対処して草の根の国民運動を展開しようとして、提唱された「郷友塾」「防衛研修会」等の動きは、私の承知する限り、その反響は頗る良く順調に遂次効果を挙げ始めている。唯残念な事は、我々が念願としている世代の継承対象者、即ち若者の関心が依然薄いことだ。北方領土の問題も既に視界に入った。教育問題も本年は教育勅語渙発百周年を迎える。そして本年最大の行事である、御大典が、わが国の伝統に即して斉々と盛大に斉行され、混乱に喘ぐ世界に対して確乎たる模範を示さねばならない。

我々は本年を郷友運動の飛躍の年、活性化の年と考えている。この為には、運動内容の充実と魅力化活性化が必要なことは勿論であるが、津々浦々に到る組織の拡充強化、特に青壮年、婦人の協力が必要である。かつての戦友、隊友人士を中心に凡ゆる地域、職域の老壮青婦の同志の蹶起を切望したい。

また迎える波乱の歳

斎藤 忠（ちゅう）
（国際政治評論家
日本を守る会代表委員
連盟顧問）

いま東欧に見る空前の変化

いま東ヨーロッパに実現しつつある重大な歴史的変化は、ひたすらにわれわれの心を搏つ。わずかに一年前には、誰がこの成果を予想できたであろうか？　なによりも、驚かれるのは、その変化の速さである。

わけても、問題は、政治の面における改革であり、また、その進展の速度であらねばならない。

経済改革に就いて言う限り、東ヨーロッパ各国の受容態度に格段の差違は無い。

西の世界の市場経済を採り入れることは、東ヨーロッパ各国が生き延びるための不可欠の条件として、つとに容認を見て居るのだ。これを拒否し、その採択に反対し得る国家が、なお東ヨーロッパに存在するとは思われない。

改革推進の中心勢力と目されるポーランド人民共和国、また、ハンガリー人民共和国は言うまでもない。改革には慎重な態度を執り続けてきたチェコスロヴァキア社会主義共和国、ドイツ民主共和国（東独）、ルーマニア社会主義共和国、ブルガリア人民共和国などにしたところで、今は、もはや、これを分別し得る隔壁は無い。

まことに驚くべき進展速度であった。ただ、あれよ、あれよと見るうちに、ヨーロッパは、その外容を変え内質を変えてしまったのである。

マルクス・レーニン主義の自壊現象

その政治改革の進展度を採り上げて見ても、変化の速さ、深さ、また範囲の広大さは、ただ、溜息を促すばかりである。

とりわけ、いま眼前の大きな問題となりつつあるものは、自由選挙制度の導入であらねばならない。更に、これ

に続いては、複数政党制の採用。

この二つの改革の実施は、言うまでもなく、共産主義の放棄を意味する。それ故にこそ、われわれ自由主義世界の諸国民にとっては、その成否は大きな問題とならざるを得ないのだ。

これら二つの制度を採り入れるということは、場合によっては共産主義政権以外の政権の受容を意味するであろう。——忌憚なく言うならば、マルクス・レーニン主義の放棄である。反共産主義革命の受容である。

問題はチャウシェスク政権下のルーマニア

「そのような途方も無い変化が在り得ると思うか?」との反問も予想されるであろう。確かに、昨日までの共産主義世界の実状を広く知る者にとっては、まことに考え難いことであるかも知れない。

だが、眼前にヨーロッパの現実を熟視し得る立場に在る者にとっては、これは、決して不可能の事ではない。まして、「もはや考え及ばぬ悪夢」では決して無いのである。

ポーランドを見よ、ハンガリーを見よ、それらは、いずれも、既にマルクス・レーニン主義に訣別を告げ終った国とも言えるであろう。或は、訣別を決意しつつある国とでも言うべきであろうか?

いずれにもせよ、これらの東欧圏諸国に見るマルクス・レーニン主義離れの実情は、極めて衝撃的である。

更には、チェコスロヴァキア、またブルガリア。——誰の眼で見ても、これら東ヨーロッパ一部の諸国のマルクス・レーニン主義離れは、もはや確実であらねばならない。

残るはルーマニアである。また、東ドイツである。マルクス・レーニン主義の本源、ソヴイエト連邦は、もとよりのことだ。

わけても、チャウシェスク政権下のルーマニアこそは、最大の問題であらねばならない。

人権擁護の戦士サハロフの急逝

これら三国のうちでも、最も問題になるのは、ルーマニア社会主義共和国であろねばならない。頑迷なまでのマルクス・レーニン主義者チャウシェスクが大統領として君臨する限り、この国がたやすくその政治的本質を変えるとは思われないと呟く者も在る。

随って、複数政党制の採択などは、当分、思いも寄らぬことであるかも知れない。完全自由選挙制にしても、同じことだ。

東ヨーロッパに在る諸国の内でも、最も改革に近寄り難いのは、或は、この国であろうか？

残るは、東ドイツ――ドイツ民主共和国であり、ソヴィエト社会主義共和国連邦であろう。両者いずれも、最も近づき難い意味でのマルクス・レーニン主義国家。共産主義は、これらの両国にとっては、思想的本質であり、存立の基盤なのである。たやすくこれを投げ出して、自由主義諸国に駈け寄ることなどは、考え得ることではあるまい。

だが、それらの諸国においてすらも、マルクス・レーニン主義からの離脱に命を賭けつつある革命の思想家は、一人ならず二人ならず、存在するのである。

その内の最も輝やかしい存在は、ついこのほど世を去った人権擁護の戦士、ソ連人民代議員アンドレイ・サハロフだ。

共産主義離脱の可能性も

それにしても、事態は、いま、すでに大きく変化しつつある。マルクス・レーニン主義八十年の歴史が招来したものは、これらの共産主義国における経済的破局の事態である。

食糧にも、日用の諸物資にも事欠く窮迫の事態。それが生む民衆の不満は、目を逐うて増大してゆく。

国際共産主義の本拠であり、他に類を見ぬ多民族国家であるソヴイエト連邦はただ一つの例外としても、いま世界の関心の的である東ドイツが直面しつつある事態は、国家の存亡にもかかわる大事なのだ。

いま、その東ドイツに自由選挙が実施されることは、万人周知の事実。時期は、この五月である。だが、その場合、当然予想されることは、非共産主義政権実現の可能性であらねばならない。

更に明白に言うならば、共産主義を離脱した東ドイツの出現だ。

しかも、この事態は、早くも、二つのドイツ統一の問題にまで進展しつつある。これが世界の政治、また経済に及ぼす至大の影響は、もはや、無視することを許されぬであろう。

ソ連内部に見る民族反乱の狂乱の動き

更に、より困難な問題は、ソヴィエト社会主義共和国連邦の赴く方向であらねばならない。

もしも、この国において、自由選挙が、また複数政党制が容認されることになるならば、当然予想されることは、

国家の分裂であり、抗争であらねばならない。

最高会議議長兼共産党書記長ゴルバチョフは、すでに、その危険を充分に承知し、予期しているのだ。それ故にこそ、彼は、いま、激しく自由選挙制度を拒否して居る。複数政党制を排除しているのである。

だが、そのゴルバチョフを始めとするソ連中枢の政治家・党官僚の必死の配慮も、工作も、いまは、すべて、空しい結果に終るのではないか？　国内に見る民族主義の高まりは、すでに怒濤の勢いを見せて高まりつつあるのだ。

その何よりの一例は、いま、バルト海に沿うて連なる三つの共和国、エストニア、ラトヴィア、リトアニアに見る狂乱の動きであらねばならない。

ソ連は、すでに、分裂を開始しつつあるのだ。

共産主義世界はすでに断末魔の事態

この狂乱の事態ほど、ソ連首脳部を困惑のどん底に追い込みつつあるものも少ないであろう。

東ヨーロッパの共産圏諸国においては、その徹底した政治工作を容認し支持しつつあるソ連なのだ。——と言うよりは、支持せざるを得ぬ苦しい立場に追い込まれつつあるソ連なのである。

その結果として、ハンガリーにおいても、また、ポーランドにおいても、遂には、複数政党制への移行をすらも黙認しなければならなかった。

更に、東ヨーロッパ諸国の経済再建のために、西側の援助を受け入れることにも、同意を強いられなければならなかった。

ソ連からの経済援助が既に全く期待できないのが現実の事態である以上、経済破局の地獄から脱れる途は、もはや、自由諸国が差し伸べる手に縋るほかには在り得ぬのだ。

繰り返し言うように、ソ連も、それを容認して来た。——容認するほかに、すべは無かったのである。

だが、その当然の結果は、マルクス・レーニン主義の自壊であらねばならない。

これこそ、ソヴィエト社会主義共和国連邦が当面しつつある最大の困難。或る意味では、命取りの事態と言うべきであろう。

（平成元年十二月十九日）

軍事常識

予備兵力と動員制度

五十嵐　晃
（連盟理事）

大東亜戦争末期におけるわが国の動員率は、およそ11・5％であったといわれている。〝囲まれた小さな国〟イスラエルが、その建国直後に死活をかけて戦った第一次中東戦争（独立戦争）では、動員率15・4％、つまり総人口について6人に1人が銃をとったことになる。

列国軍の兵備は、現在も常備兵力と予備兵力（このほかさらに民間防衛隊等）からなっており、予備兵力の構成や動員制度については、各国それぞれの事情に応ずる特色をもっている。

それらのなかで世界的にもっともよく知られているのは、武装中立国スイスの民兵組織であろう。ちなみに、スイスの現役兵力は約2万といわれるが、その大部は訓練中の徴募兵で、常時軍務についているのは僅か1千5百名に過ぎない。しかし、有事動員により、たちどころに62・5万（総人口の約10％）にふくれあがる。また、そのほかに重要な民間部門の予備要員10万と民間防衛要員40万を運用しうる態勢をとっている。動員にあたっては、予め準備し、訓練されたところにより、いわゆる〝押しボタン式〟に、また当時の状況に適合した〝部分動員〟も可能である。軍事訓練は、兵役につく20才から始まり、30年継続する。すべてのスイス人は市民であると同時に兵士であるといって過言ではない。

スイスのように徹底したものでなくても、列国はみな、それぞれの国防理念に基づいて、予備戦力の保有の仕方と動員のやり方について、工夫をこらしている。殊に、先進工業諸国では、たとえ徴兵制度を採用しているところでも、国防部門にふりむける人的資源にいろいろな問題を生じてきており、予備に依存する度合が高まる傾向にある。

軍事超大国ソ連が、このところ通常戦力の削減をいい出している理由の一つに、やはり壮丁適令層の人口減の問題がある。

ひるがえって、わが自衛隊でも、昭和29年以降、予備自衛官制度を設けている。その意義は、次の3点にあるとされている。

①国家の非常事態に常備の不足を迅速に補うことができる。

②有効な予備戦力の確保により常備とともに抑止力となりうる。

③広く一般社会の中に予備を保有することにより国民の国防への関心を高め、防衛基盤の育成に寄与できる。

以上は、列国軍にほぼ共通の考え方であろう。

しかしながら、予備自衛官の勢力は、発足時1・5万（陸のみ）から現在4・79万（陸・海・空）と遂次増強されているものの、前記の意義を達成するには、いかにも少ない。また、採用対象が限定されているところから、これを見直さない限り、大巾な増員は望めないようである。

米・中・ソの場合とは比べようもないが、西側の一部の国々の例と比較してみると、

〔英国〕志願制、軍務経験者からなる予備役のほか軍隊経験を必要としない志願予備役の制度を有す。正規予備（現役3年以上勤務者）と長期予備（正規予備終了者）及び地域部隊要員予備兵力31・98万、別に民間防衛組織あり。

〔西独〕徴兵制、男子は15ヶ月間の現役勤務の後、一定の年令まで予備役指定、即応予備・緊急予備・人員予備に区分、予備兵力85・0万、別に民間防衛組織あり。

〔フランス〕徴兵制、満18才から50才までのすべての男子は一定の期間兵役（1年）民間防衛などの役務に従事する義務及びこれらの役務に従事した後、一定年令まで軍又は民間防衛の予備役となる義務、待機役と予備役に区分、予備兵力39・6万、別に民間防衛組織あり。

〔韓国〕徴兵制（2.5年）、常備予備軍140万及び郷土予備軍、ほかに民間防衛隊。

また、有効な予備戦力たる条件としては、訓練が行き届いていること及び迅速な動員が可能であることが必要である。戦略環境上高度の即応性を要請される国ほどそうである。イスラエルなどはその代表的な例であろう。召集令状はなく、各個人に電話や口達でなされる方法やマスコミ（放送局）を利用して隠語で発令される方法があるといわれる。

欧州のNATO諸国でも、おおむね2～3日で動員できる態勢をとっているようである。

もとより、装備がいちじるしく近代化した現在、質の高い、精鋭な常備兵力を維持することが最優先であることは論ずるまでもない。と同時に、所要の量質の予備戦力をもって縦深性を増すことは、万一の対処及び侵略の未然防止のためきわめて重要であり、防衛基盤の育成にも寄与することになる。

随想

失われた商業道徳を嘆く（二）

――道徳復興に国民総進軍――

大塚道廣
（大洲陶器㈱社長
航少候23期）

高慢不徳ココム違反

昭和六十二年春以来、大きな日米問題となり、マスコミを騒がせ、国民の関心事となったココム違反事件がある。

ココム違反と知りながら、虚偽の申請をして計画的に輸出し、暴利を貪らんとする悪智恵を巧に応用した我利我利作戦ともいうべきものである。人間の貪欲をむき出しにして、再三に亘り暴走を続ける大企業なるが故の公然不正であり、法の目をくぐった悪徳商法の最先端をゆくものであるといわざるを得ない。

国家的見地から言えば、日本の安全保障を無視した経済万能、利益追求を第一とする邪念思想と、政府関係各機関の安全保障に対する無責任さと怠慢さが、このような国家浮沈にかかわる一大事件を引き起したものである。

これは大企業としての甘えが、高慢不徳なる邪道の道へと追いやり、国益も国の威信も失墜して自業自得、の報いを受ける結果となる。軽挙妄動も甚だしいと言わざるを得ない。

現代は新しい創造の時代であり、労働集約型から知識、智能集約型に変身しつつあり、この智力万能時代が人としての道を犯し、悪智恵万能時代に逆行してはならない。

巧妙な手段によって法の網をくぐり、一攫千金的暴挙は日本人として最大の破廉恥的行為であり、国を愛し、同胞の幸とその繁栄を希望う善良な国民を欺く非国民と言わざるを得ない。

このように自己の牙城を築くことのみに汲々とし、国を危くする愚さを二度と起さぬよう公正なる法の適用は勿

論、自戒反省を促し、有恥且格の道に励むべきであり、企業体質の改善、人間回復の要切なる所以もここにある。

再び昭和六十三年十二月六日には、ミサイルに使用可能な兵器消火剤をソ連に輸出したダイキンが、ココム違反に問われ告発された。度重なる企業の違反に、国民は焦慮の色濃く、不安にさらされている。

金の亡者に唖然とする

日本列島財テクブームといっても、株で二億円ももうけた人は少ない。法を無視して税務署に届けない人はもっと少ないだろうが、正しく法が行われているかどうかを監視するはずの人が、窃かに巨利を得ていたとは、「税の公平なんてあったもんじゃない」。街のサラリーマンの表情は厳しい。昭和六十二年分の自営、自由業の確定申告による所得ごまかしも最高七二四二億と過去最高であることもわかった。実に恐ろしい。

不正はまだまだあとを絶たない。昭和六十三年初頭のことである。株で二億円もうけたことの申告漏れが明かになり、「不注意だった」と釈明している人がいる。

注意を怠ると、つい申告漏れをするほど、いまの税制は複雑怪奇なのであろうか。「氷山の一角です。シマから永田町のセンセイ方に流れる金は年間五十億、百億じゃきかないんじゃないか」と、いっこう驚く様子がない。シマの反応である。これは特定の者だけでなく、カネ余りの現象が資産家をますます資産家にしている。

税制改革の基本は、何よりも先づ株などのもうけに対してや、大土地所有者に対する課税を強めることを、土地税制改革こそ、不公正是正のかなめでもある。

また同じころ、無資格で七千人を治療したがん断食療法が大阪府警により摘発された。「粉ミルクを使った断食療法でがんは必ず治る」と医療行為をしていた「健康再生会」会長の加藤清ら二人を医師法違反で逮捕した。治療を受けた患者はこれまで約七千人にのぼっており、加藤らは七年余の間に会費など約二十二億円余を集めていた。

同会の合宿中に自殺したり、容体が急変して救急車で運ばれ死んだ患者も出ており、医師でない加藤らの無資格行為に唖然としている。

このように尊い人命を無視し、これを食い物にする卑劣きわまる行為は断じて許されない。

更に、霊感商法をめぐって「献金」という新しい形の被害を引きおこしている。指摘された「霊石愛好会」が、宗教法人「天地正教」に変っていたことがわかり、全国霊感商法被害対策弁護士会では被害拡大を懸念している。

「先祖のたたりがある」などと不安がらせ、印鑑や、壺などを売りつける「霊感商法」の実態について調べていた日

弁連では、意見書を公表し、「組織性明確」と結論づけている。

世は正に様々な商法が発生するもので、欲望の名の商法は後を絶たない。

欲の裏技、隠し技、止まることなし

昭和六十三年頃、国税局の企業調査では、資本や取引が同系列の企業同志で共謀して不正な経理操作をし、所得税や法人税を逃れる、悪質な「グループ脱税」が急増している。総額七四五億円に及び、手口も巧妙である。

地上げ屋がうろつく「幽霊届け出」仲間同士の売買など、企業モラルが問われる恐ろしい時代。悪徳商法は、これからまだまだ続く。

新宿の不動産会社の社長本間邦治さんが、地上げのトラブルから殺された事件があった。ビル用地の地上げ資金として、大手生保から約四百億円が建設会社に融資され、内約七十億円が被害者に渡っていた。

余剰資金が、土地取引に投入されていた実態が、殺人事件捜査で改めて裏付されたものである。悪徳商法が殺人鬼を生むとは、世は正に無法の時代としか言えない。

昭和六十三年五月には、このような止まることなき悪徳商法にストップをかけるべく、消費者トラブルに敏速に対応しようと、通産省と、消費者関係十一団体をオンラインで結び、トラブル情報をコンピューターで集中管理する、システムが稼動した。

第二の豊田事件は何としても食い止めたいとの対応策ではあるが、今にして、しかも法の裏をかいた悪徳のぬけ道に、果して如何なる効力を発揮するか、疑問である。

ワンルームマンションの最大手「杉山商事」が、狂騰地価絡み続く所得隠しで、二億九千万円、架空の手数料を計上し、役員名義、株で財テクを図っていたことが、調査で判明した。

これは都心の地上げ―地価狂騰劇の舞台裏での、企業の利益あさりの実態を浮き彫りにしたもので、そのすさまじさ、企業モラルを問うどころの沙汰ではない。

昭和六十二年度事務年度版の「大企業白書」では、内需拡大の〝追い風〟の中で、「株や土地取り引きで得たアングラマネーを、さらに株などにつぎ込み、『裏財テク』で黒い所得を膨らます……」と、脱税手口の生々しい実態を暴き出している。

全国の大企業のうち疑問のある五百社を税務調査した結果、その97%から史上最悪の四千六百十二億円の申告漏れが見つかった。いずれも優位を占める大企業での悪質脱税である。

その欲の裏技、隠し技、株で太らせ〝床下貯金〟の実態

は、明電工、茨城県精神病院長、兵庫県会社役員等様々であり、又愛知県の空調設備業者は、工場内にビニール製の業務用パイプ管部品を詰めた段ボール箱に、一億六百万円相当の割引債券が見つかった。

高潔、悪鬼も頭を垂れる美談

このような悪徳商法の横行する中で、悪鬼も頭を垂れる美談がある。

東京渋谷の高村藤久さんという八十歳になるお年寄りである。「身体の不自由な人の福祉に役立って」と、なんと八億円の大金を地元の渋谷区に寄付した。土地を処分した金の一部である。

「ものも金もいらぬ、世の中の人にいろいろお世話になったことのお礼」にと差し出されたそうであるが、自治体への現金による寄付としてはおそらく史上最高で、区側はびっくりしている。

高村さんは「商売を始めて五十年以上になったが、幸い金に苦労したことはなかった。しかし死んで金を持っていけるわけでもないし……」と話している。

誠に高潔無類というか、その崇高な理念には感動の次第である。金輪際の誓いを破る鬼畜どもも反省自戒し、高村さんのお尻の垢でも飲むとよい、それでもまだ効き目はないだろうが。

昭和六十三年六月の頃である。偽〝やせ薬〟で十四億円を荒稼ぎした四人が逮捕された事件があった。

五千六百人の女心を〝手玉〟にして健康食品を売りつけた、横浜のそう身美容健康補助食品会社「エスワール」社長瀬川俊彰らである。

「一年でボロもうけし、やめるつもりだった」と供述している。

以上はあまりにも悪徳商法ばかりの氾濫で変な錯覚に陥り易いので、ここらで一陣の涼風を呼び起す、明治の商人道について申し上げたい。ある記事で拾った挿話である。

明治の商人道

もうとっくに亡くなった母について書かれた記事である。

戦前、私の家は米屋であった。その頃、店を閉めてしまったあと、米をわずか一升（約一・八㍑）ずつ買いにくる家庭があった。そういうとき、米をマスで量って売るのは、当時、小学生であった私の仕事であった。

私は、「一升ばかりの米を売るのは面倒だから、俺に量らせるんだろう」とばかり思っていた。

或る日、母から「お前は一升の米を、どのように量っているのか」と聞かれた。「妙なことを聞く」と思いながら、私は「一升マスのスミを突っついて、米をいっぱいにし、

それから計り棒で平らにする」と答えた。
母は、「それでよい。お父さんが量るとマスの中で米が全部立ってしまうので、お前が量るより少なくなってしまう。夜わずかなお米を買いにくる人は、生活が苦しいのだから、まけてやりたいので、お前に量らせているんだヨ」といった。
私は母の話を聞いて、跳び上りたいほどうれしかった。それからは、私の量る一升は、いつもマスに山盛りであった。
それから間もなく、米屋さんにも「定休日」が定められた。ところが、私の家では定休日の看板を掲げながら、いつも店の戸を少し開けていた。私は母に「折角、定休日ができたんだから、定休日にも稼ぐような、みみっちいことはしない方がいい」といった。母は、お前はまだ分からないのか、といった悲しい顔をして、「その日の稼ぎで、米を買いにくる家の人たちは、どうなるのかネ」といった。父は、その人たちのために、店の戸を少し開けていたのであった。
戦時中、米屋は統合されてしまったので、私は店を継がなかったが、幼い日に両親から教わった「明治の商人道」だけは、子孫にも伝えていきたいと思っている。
以上であるが、心温まる誠に麗しい話であり、その心情には深い感動を覚えずにはおられない。
精神の国日本の真髄は正にここにありというべく、現代の悪徳商人には全く耳の痛い話である。新しい平成の時代こそ、国民総力を挙げて悪を追放し、明治の商人道を復活し、道義復興、人間回復への道に猛進すべきである。
（つづく）

戦いの九原則（その8）

武岡淳彦
（兵法経営塾長 連盟顧問）

目的、目標は、マネジメントの核心であるだけに、それを論ずるとなれば付帯してさまざまな問題が顔をだす。先月号では情報・調査を論じたが、本号からようやく目標の分析に入る。兵法の要諦を一言でいえば「要点に兵力を集中する」ことだ。だから『作戦要務令』の綱領第二に「戦捷の要は有形無形の各種戦闘要素を綜合して敵に優る威力を要点に集中発揮せしむるにあり」と明快に述べている。筆者が陸幕防衛部の副部長をしていたころ、日米安保条約の関係でアメリカ太平洋軍の参謀と会談したあと、戦いの要諦を聞いたところ、その大佐参謀も即座に「要点へのパワーの集中」と答えた。

この要点が目標だ。筆者が京都の兵法経営塾で、集中の原則を話したところ、この重要性を痛感した食品関係の某社長が、それまで分散していた手持株を某株に集中し、値上りで大きな利益を得ようと企んだが、非情な市況は逆に値下りして三千万円損してしまった。次に会ったときその社長は「先生のいうのを実行に移して損してしまいました」とうらめし気に申述べたので、筆者は「集中したのは悪くないが、集中する目標が悪かったのです。要点でなかったのです。三千万円で要点の勉強したと思えば高くないですよ」といい、もし要点不明なら、逆にリスク分散のため集中しない方がよいと教えたのである。

要点の重要性はかの『三十六計』でも、第十八計「擒賊（きんぞく）擒王（きんおう）」および第十九計「釜底抽薪」と二計でとりあげていて、その奪取は重要な策略であると教えている。前者は「敵部隊を倒すには大将を捕えるのが早道」と教えており、後者は「ぐらぐら煮えたぎる湯を冷ますには、釜の下のタキギを抜けばよい」と原因を除くことが問題解決の鍵になると教える。いずれも要点を叩くことの重要性を強調したものだ。この点についてクラウゼウィッツも「勝つためには、常に敵全体の重心を目指し、全力をあげて突進せよ。敵の軍隊・首都・同盟国などは重要な突進目標である」

と、戦略論らしく物理的な重心をつくことこそが勝利の秘訣だというのである。

そこで問題は、「要点とはどこか」である。日露戦争の旅順攻撃は、この点で大きな教訓を残している。また目的を確立しないで目標をきめることの怖しさについても深刻な教訓をのこしている。日露戦争は全体的には、戦争開始前の政府や陸海軍統帥部の予想をくつがえし、好調な作戦経過を辿って勝った。ただひとつ、戦略的価値のきわめて高い旅順要塞の攻撃だけは、戦略が拙劣で、思わぬ難戦を招いた。陸軍は大連を、満洲派遣軍の兵站基地として使用したかったが、旅順に敵艦隊と二万の陸軍がいてはとてもできない。海軍もこの艦隊をバルチック艦隊と連動させないために、事前に仕末したかったが、敵艦隊は要塞に隠れて出てこない。それではと海軍は数次にわたり旅順港入口に艦船を沈めて艦隊の出航を不可能にする港口閉塞作戦を行なったが敵の妨害で失敗した。こうなれば陸軍部隊による地上攻撃しかなかった。この陸軍の攻略部隊、すなわち乃木大将麾下の第三軍は、もともと敵のクロパトキン軍の撃破に控置していた部隊だけに、一刻も早く攻略を終え北上させる必要があった。

こうして明治三十七年八月十九日から行なった第一次総攻撃は、旧市街北側の東雞冠山から水師営第一保塁に及んだが、敵保塁はきわめて堅固で抵抗も激しく失敗した。第二次攻撃は、第一次が強襲法で失敗した反省から、壕を掘りつつ攻撃陣地を進め、損害少なく敵陣地を攻略する正攻法をとり、九月十九日から、東雞冠山から二〇三高地にわたる広正面を攻撃した。だがこの攻撃も狙いが定まらず正面過広で失敗し、事態は憂慮すべき状況に陥った。大本営でも御前会議が開かれ、満洲軍総司令部でも児玉総参謀長直々戦闘指導に赴くことになった。折しも救世主二十八糎榴弾砲が続続到着しつつあった。十一月二十六日から実施した第三次総攻撃は、途中から主攻を二〇三高地に変え巨砲で攻めた結果、ようやく陥落し、明治三十八年一月一日開城にこげつけたのである。だがこの間の死傷者は実に五万五千の多きにおよんだ。

この旅順攻撃は、当初北側の堅固な保塁を攻撃して失敗し、ついで攻撃法をかえて行なったが失敗し、最後に南側の二〇三高地を攻めてようやく成功した。この失敗の最大原因は目標がはっきりしなかったからだ。ロシア艦隊か、それとも堅固な要塞そのものかこれが明確でなかった。日清戦争で軽く落したことが、問題なく落せるとの判断となり、要点＝目標など関係ないと考えて攻撃にかかった。ところが失敗すると目標より、いかにして落すかの攻撃方法の探究に重心が移った。ここで本来なら改めて目標を考

え、必要な地形・陣地分析をすべきであったにもかかわらず、汚名挽回への人間心理に災いされて目標・地形の分析を怠った。つまり旅順攻略の目的は、ロシア艦隊の撃破にあったのだから、目標をそれに絞り、対艦射撃が可能で、いちばん奪りやすい山はどれかを調べ、そこへ戦力を集中すべきであった。要は目的が曖昧なまま攻撃したため、目標がうやむやになり、最後になってやっと二〇三高地に気付いたときには既に多くの損害を出していたのである。

この旅順攻撃を企業でいえば、はじめに売上げがあり、そこから変動費を引いて粗利をだす、粗利から固定費を引いて残れば儲かった、残らなければ赤字という経営法と同じだ。なぜなら「始めに売上げがあり」とは、「なんでもかんでも商売をやってみる」つまり「必要な経費や利益を稼ぎだすため、どれだけ売上げるという目標をたてずに商売するようなものだからだ。もちろん新規開業ならともかく、従来からやっておれば、今年は従来の得意先との取引きで、たとえば八割は売上げられる。だがあとの二割は従来の得意先の閉店などのため新規に開拓しなければならないというケースが多いだろう。それにシェアの拡大も考えれば四割に該当する分を新規に開拓する必要がある。この点を明確にしないまま商いを続け、決算期が近づいて「これは大変」と、その不足分獲得に狂奔するようなものだ。

この考え方の根底には、やっておればなんとかなるとの安易な意識がある。このような考え方は戦略ではない。戦略的発想とは、状況を明らかにして目標をきめ、努力を集中することだ。なんとなく、重点もきめず、とにかくやってみる、こんなことでは旅順攻撃のように損害（赤字）をだしてはじめて気がつくようなものだ。こんなケースが起きるのは、行きがかり上、目的・目標を考えずに仕事を始める場合に多い。

ところで旅順攻撃は、ロシア艦隊を叩くのが目的か、要塞を攻略するのが目的かをはっきりさせずに攻撃を始め、そのために目標が要点でなくなって非道い目にあった好例だが、目標を二つ選んだがために大敗を喫したのがミッドウェー海戦だ。ミッドウェー海戦は、それまで破竹の進撃を続けていた日本海軍が初めて大敗を喫し、それから戦局の流れが変った呪われた海戦である。この海戦が起きたのは昭和十七年四月のドゥリットル空襲だ。それを発案したのはルーズベルト米大統領だが、これで日本海軍の哨戒空域には大きな弱点があることがわかった。日本海軍としては哨戒域をさらに東方に拡げるために、ミッドウェー島を占領しようと考えた。

だがそのためにはハワイにいる空母艦隊との激突が考えられた。当時の連合艦隊は行くところ敵なしであったか

ら、むしろ敵空母がでてくるかの疑念さえもっていた。とにかく連合艦隊は主力をあげて瀬戸内の柱島泊地から出て、六月五日ミッドウェー海域に進出したのである。敵空母艦隊がハワイの真珠湾の基地から出撃したか否かの偵察は、重復した手段が計画されていたが、すべて実行できなかった。だが旗艦大和は高塔受信で途中それを知ったが、無線封止のため第一航空機動艦隊に伝えなかった。このため一航艦は、ミッドウェー島攻撃に第一波攻撃隊を発進させたのち、しばらくたって敵空母が北東海域にいることを知った。そこで第二波攻撃隊を雷装しようか、爆装しようかで迷っているときに第一波が帰投した。各空母は第一波の受け入れと、第二波攻撃機の着装変更で錯綜しているところを、敵空母から発進した急降下爆撃機に襲われ、僅か五分間で三隻撃沈されたのである。拙いことに、そのとき各空母の護衛戦闘機は、敵の雷撃機迎撃のため皆海面近くに降下していたので、高空の急降下爆撃機を迎撃できなかったのである。この敗因の第一は、目標を二つにしたことだ。「二兎を追うものは一兎をも得ず」とは、目標を二つにすることを戒めたことわざだ。それは戦力の集中を妨げ、指揮の混乱を招き、大きな誤算をもたらすことになる。

郷友連盟の理念

（昭和五十三年三月総会決定）

わが国の歴史と伝統を尊び、愛国心を高め、郷土の繁栄、日本の安全を図り、世界の平和に寄与する。このため

一　私たちは立派な日本人としての修養につとめよう。

一　私たちは天皇を中心として全国民の団結を固めよう。

一　私たちは道徳を重んじ、公共に尽くし、国民の義務を果たそう。

一　私たちは国や社会の秩序正しい進歩を図ろう。

一　私たちは力を合わせて郷土を、日本を守ろう。

祖国日本に愛と誇りを持つ子を育てる（その7）

――英霊に感謝の心を――

多田三重子
（国際教育研究所研究員）

一、皇居遥拝

平成元年十一月三十日、南の島はさわやかに明けました。一点の曇なく輝くコバルトの大空と白波寄せる大海原。右手にはこんもりと茂る木々の緑。私達はその先、はるか彼方の祖国日本に向かって整列しました。朝礼です。

○「皇居遥拝・礼」　田中館副団長の声は重々しく響き、太平洋戦跡参拝団の一行十九名、慎み畏んで深く拝礼。

○「国歌斉唱」厳かに歌い上げる「君が代」斉唱二回。声は大自然の中にゆるやかに溶け入りました。

○「英霊に対し奉り黙禱」静寂があたりを包み、頭を垂れた瞳に熱いものがにじみ上がります。

○「ペ島の桜を讃える歌を8番まで歌います」

激しく玉が降り注ぎ　　オレンジ浜を血で染めた
つわもの達は皆散って　　ペ島はすべて墓となる

ペリリュー島に玉砕した勇士を讃える歌を涙を流しながら終わりまで斉唱。（パラオ国大統領ご両親の作詞作曲）

斉唱は日によって「海行かば」や英霊からの呼び掛けを歌にした「緑の墓の歌」（元ペ島小学校長夫妻作詞作曲）を英霊に捧げ次いで団長の話と団員の所感発表があり、旅の目的をより強く自覚し共感した毎朝の集いでありました。

二、感謝と慟哭

私共の太平洋戦跡参拝団は名越二荒之助教授を団長に日本各地からの参加者と、神官で組織する清流社の遠藤事務局長も同行されて十九名、六泊七日。南海のコロール・ペリリュー・グァム・テニアン・サイパンの五島を飛行機とクルーザーで訪れました。見聞と所感の極く一端を述べ、家庭教育とのかかわりをご一緒に考えたいと存じます。

(1)「ああ、ペリリュー島」

成田発・サイパン・グァム経由・コロール島のホテルに

着いた時、パラオ国大統領のご両親と男女数名が満面の笑みに親愛の情をこめ「こんにちわ」「いらっしゃい」と迎えて下さいました。大統領は父方、母方とも祖父が日本人で母堂は戦前に日本の女学校をご卒業。知性と行動力に富む女性であります。

この国は「日本のお蔭で独立できた」とわが国旗に似せて海の青を地の色に、満月の黄色を中央に染め抜いた月章旗を国旗とする親日国であります。

私共は十二月一日の夜、政府要人との懇親会を持ち、副大統領に記念品並びにスポーツ用品・図書その他各種の土産を贈呈し、副大統領は島内にラジオでこの夜の交歓を報道する。両国の新しい親善・交流の歴史の始まりだと感謝されました。お客様の名は、豊美・トヨ子・サチ子・まさえ・シゲオと言い、日本語での会話も可能で日本（委任統治）時代は目的を持ってよく働いた、人殺しはなかったと昔を語りました。また小学校二年の時に戦争に出合った五十七才のガイドのケラさんは、ほたるの光を三番までと仰げば尊しの一番を熱唱してくれました。

そのパラオ国のペリリュー島は昭和十九年九月十五日の緒戦以来、敵味方の兵士の血潮が海水をオレンジ色に変え珊瑚礁の丸い山形が鋸の歯形になり、一木一草残るものなく焼き払った、敵の物量作戦によくも耐え抜き戦い尽くして七十余日。遂に機密書類と軍旗を奉焼し「サクラ・サクラ」の暗号を打電し、中川司令官・村井参謀は自決。軍の玉砕となったのです。

四十五年の歳月を経て島は今、南洋ざくらが咲き揃い、マングローブの大樹を茂らせ、やしの実が豊かに実のるジャングルの島、心温い平和な島となっています。人々は、「ペリリューの人を戦いの前にコロールに移してくれた」「おかげで島民は生き残った」「日本の兵隊さんは私達のために死んだ」とトヨ子さん達の話には実感がこもるのです。その感激が「ペ島の桜を讃える歌」に結晶したと思われます。順序が前後しましたが、私共をコロールの港で乗せたクルーザーは、五色（いついろ）に、時には七色（なないろ）に染め分ける海の変幻の妙に目を見張らせ、更にパラオ松島と呼ぶ絶景を展開しながら二時間半。今なお激戦の跡を偲ばせる赤錆びた穴ぼこだらけの舟着き場らしいものから砂浜に降りた私共は「ここがオレンジ・ビーチ」と血潮に浸った砂浜・血肉を糧に茂ったマングローブや台湾松の高木。寄せては返す白波にも常ならぬものを覚えて言葉少なになるのでした。

(2)　ペリリュー神社慰霊祭・ペリリュー島慰霊碑参拝

参拝団の大谷さんはペリリュー島に夫を捧げた未亡人で昭和十九年十二月三十一日戦死、の公報を受けました。

玉砕後の生存三十四名の一人としてゲリラ戦で敵を恐怖と混乱におとしいれた、最後の勇者であります。現地召集の夫を見送ったあとの十九年八月、軍命令によりテニアン島より引揚げた大谷夫人は、六才と三才の二児と第三子を胎内に抱く二十五才の若妻でした。

「四十五年めに始めてお墓詣りができる」と感謝する夫人は、嘆きも苦しみも胸中に沈潜させた気高く美しい日本女性の姿を喪服に包んで合掌・慰霊なさいました。

清流社の遠藤氏は神官の正装に威儀を正し祝詞(のりと)の声も厳かにペリリュー神社の大前に定例の慰霊祭を執り行なわれました。空花氏持参の大きな日章旗・月章旗は神前に掲げ各十本の小旗は団員が握りしめての祭礼で、「みたまに届いてよ」と涙に咽(むせ)びながらも「海行かば」を声の限りに斉唱いたしました。

清流社は十年程前から、玉砕の島々に遺骨を収集し、神社の再建・修復に努力され、社殿・鳥居・狛犬等を日本から般入して安置された由。献身的ご活動は並大抵の苦労でないと想像します。南の島の雑草の伸びは早い。境内の除草さえも大変な労力。最近は島の若者も除草に協力すると聞いて嬉しいことです。

キンロウホウシは、ダイジョウブ・シンパイナイなどの言葉と共に原地語として定着しているとか。言葉は心です。日本の心が島の人々に生きている一例と思われます。それは全島を緑の墓としてこの地に永久に留り給う勇士への敬愛が島民の心に根づいてのことでありましょう。

ペリリュー慰霊碑拝礼の後、背面の小さな扉が開かれ、拝見したのは幾多のご遺骨の各部分でした。誰人(どなた)とも判別できず祖国にも、まして父母兄弟のもとにも帰り得ぬこのお骨……。突如、私の胸奥から嗚咽(おえつ)がこみ上げました。思わず、十数歩離れて皆に背を向け、「ウーッ・ウーッ」と声を押さえました。素直に慟哭してよいものを……。

洞窟陣地の入口を破壊あるいは封鎖され、またガソリンを流し込んでの火焔放射に……。ああ、わが戦士・わが勇士の命絶えた数も多いと聞きました。

だからこそ清流社は極限的難作業を敢行してご遺骨を探索・収集されるのです。合掌。

(3) 我無山(ガムサン)　平和寺

パラオ国のコロール島の慰霊碑と元官幣大社の南洋神社の参拝・戦跡に詣で国民的感動をさらに深くした私達は、マングローブの花で作った純白のレイを二重に首に掛けていただき、大統領のご両親や有志多数に見送られてグアムへの機上の人となりました。花を集め四十本余りのレイを丹念に作った女性達は散華した英霊への感謝と日本への親

愛とをこめて花々をつなぎ合わせたことでしょう。

グアムの我無山（ガムサン）の空は白い雲を浮かべて紺碧に輝いていました。整地された広大な芝生の奥、白亜のグアム島慰霊碑は日米の勇士を祀って「合掌祈念」の形で天空高く伸び左側のポールに星条旗がひるがえっていました。

平和寺の斉藤住職の読経に続いて拝礼。国旗を掲げ持参の米・酒を供え、線香の煙はふくよかな香りを漂わせて、みたまを慰め奉りました。

平和寺は東京の祐天寺から派遣の斉藤住職によって勤行（ごんぎょう）されています。住職の長女マリアちゃん（二ケ月）は若く健気な大和撫子なる母の胸で安らかに眠っていました。

住職の案内でグアム島最後の激戦地又木山戦闘司令部壕跡や、グアム政府指定史蹟、日本軍いのちの清水を参観・深く合掌し、平和寺に掲げられた司令官小畑中将・師団長高品中将の遺影と玉砕の英霊に「御霊前」を供えました。

(4)　テニアン島にも　バンザイ岬が

テニアン島のアデラ・クルスおばさん（62才）は有名な親日家で私共も大歓迎を受けました。この平和な島に、広島・長崎への原爆搭載地点No.1・2があり、原爆機発進の長い滑走路が今もそのまま残っています。

そしてこの島も軍人と居留民合わせて一万三千余名玉破の島であり、海岸にある慰霊碑のずっと前方に、サイパン島のそれと酷似したバンザイ岬があるのです。捕虜となるより万才と叫んでお国のために死を選んだ岬なのです。

三、英霊への感謝の心を育てましょう

サイパン・グアムへの観光客は急増しても、戦跡や神社慰霊碑への参拝は極く一部の人に限られ、観光案内には、そうした案内は皆無なのです。それは靖国神社って何？と子供達は知らず、閣僚の靖国神社参拝が物議をかもすわが国の風潮と決して無縁ではありません。

私自身も今回の小さな旅で平和慣れの胸を厳しく叩かれたのです。幾多英霊の大犠牲の上に築かれた平和であること、祖国のため、銃後のために尽くして散った勇士の働きと加護・生き残った世代の勤勉による発展であることを、若者や幼な子に語り継ぎ教え遺さねばなりません。これは私共大人の務めであり責任と思います。

国を守る気概も、国守る人・国守った人への感謝や報恩も教えられ育てられてこそ、日本人の魂として継承され、発展します。私の拙い心情、ご理解いただけますでしょうか。ご賢察の上、青少年の日本人の心・英霊に感謝する心の育成に少しでも活用願えれば幸甚です。合掌。

（1・12・17記）

現代に見る間接侵略・革命（二十）

狩野信行
（日本軍事史学会監事）

前にも申し上げました通り、わが国における「現代」とは、一般に、昭和二十年八月十五日の敗戦以来、今日迄とされております。「近代」と「現代」との世界的視野から見る大きな違いは、これ又前にも申し上げましたとおり、世界七大列強時代（厳密には諸大国の合従連合の時代）から、資本主義の雄・米国と共産主義の雄・ソ連との二大軍事大国時代（核大国時代）へと移ったことですが、この「現代」も既にして四十有余年、さすがに様変りが激しくなって参りました。

御存知のように、昨今の共産世界の、経済の停滞と立ち遅れ、それではならじと「やる気」を起こさせる為の情報公開化は、人々に対して自由への渇望を高めさせ、それは遂には各種のデモ・ストの頻発、民族独立の為の騒擾等の政治的危機をも招くようになって参りました。ポーランドにおける「連帯」中心の内閣の出現。ハンガリーに到っては、共産党が社会党へと名実ともに変身し、今迄の国家社会主義から「民主的社会主義」なるものへの変身を宣言するに至りました。

これからの間接侵略・革命

それでは、これからの世界における、そして特に日本に対する間接侵略や、日本における革命はどうなって行くのでしょうか。ここで妙に気付くことが三つあります。一つは、中共や北鮮のような東アジアの共産国と、ソ連・東欧のようなヨーロッパの共産国との間の相違です。二つは、現存の宮本体制下の日本共産党を中心とする、日本の左翼の特殊性であり、三つ目は、マルクス・レーニン主義の本質的事項は何だろうかと言うことです。

先ず第一の点について、簡単に当って見ましょう。天安門事件に見る中共・中国の体質や、北鮮に見る金日成王朝の特異性は、同じ共産主義国と言っても、それぞれの国の歴史、そして文化によって随分と異なるものだと言うことが感取されます。平成元年夏以来の中国を巨視的に眺めま

すと、最近の中国は、数千年来の中国の数々の騒乱・革命の時と余り変っていない、特に近代末期の太平天国の乱あたりと、そうそう変っていないのではないかとさえ思われる節があります。端的に或る一つの表現をもってするならば、このアジアの大国・中国なり、北朝鮮なりは、「ある種の封建的共産国家である」とさえ言い得るように考えられます。ソ連や東欧諸国とは異なります。

次は第二の点です。御存知のように、日本の歴史そしてその文化は、他国のそれらと甚だしく異なっております。それだけに日本共産党を中核とする日本のマルクス・レーニン主義勢力は、これ又諸外国の同勢力の動きに比べ可成り異なっておりましたし、これからも可成り異なるものとなる可能性があります。この点につきましては、近い将来述べさせて頂くこととしますが、ここでは今の日共の宮本顕治体制が次の、例えば上田・不破体制に変ったならば、基本戦略は兎も角として、その具体的な革命戦術は可成り違ったものになって行くだろうと言うことだけを申し上げるに留めて置きます。

次は第三点についてです。これは右の第二点と深くかかわる事項ですが、社会思想としてのマルクス・レーニン主義、哲学としてのマルクス・レーニン主義は、やはり本質的な欠陥があると見るべきだろうと言うことです。最近は、日本を始め世界の左翼人の多くは、又多くの東欧諸国の共産党でさえ、スターリン主義は、余りにも人権無視的であり強圧的であるので反対だとし乍らも、マルクス・レーニン主義の評価については、（極く一部の者を除いて）概ね口をつぐんでおります。ある種の人々に到っては、マルクス・レーニン主義の基本を為すところのマルキシズムは愛の哲学的体系だなどと申しておりますが、これはとんでもない詭弁であると見なすべきでしょう。御存知のように、マルクスは、ドイツに住むユダヤ人の子供として生まれ、そして育ちました。周辺のドイツ人達からのいじめ、そして又一家がその生活故にキリスト教に改宗したところから生じた同じユダヤ人社会からの排斥の中で、悩み苦しみ乍ら育ちました。彼の理論の基盤にあるものは、数多くの人々も指摘しているように、人々に対する「憎しみ」にあることは間違いないように思われます。この人間に対する憎しみの心に増幅されて、唯物史観が確立し、階級史観が強固なものになって、資本論を始めとする多くの著作がなされ、「共産党宣言」その他が出されたと見てよいでしょう。「憎しみ」の思想からは、人々を幸せにする方策は生まれて来ないのが道理と言うものでしょう。

マルクス・レーニン主義の諸体系は、この本質的特性の上に組み立てられております。日本における所謂左翼の人

々も、この体系から離れることが出来るのでなければ、人々を幸せにする事などは出来ないでしょう。が、彼らの明治開国以来の軌跡を眺める時、そして特に日本に社会主義なるものが盛んになって来た、明治四十年代以降からの日本左翼人の動きを眺めるならば、このマルキシズムを早々に捨てるであろうなどと言う事は、とても考えられません。このことは、あの国家社会主義を捨てつつある東欧の一部諸国でさえ、相当程度あてはまる事です。これを要するに、これからの日本に対する中共・ソ連等、国外共産勢力の間接侵略や、日本における所謂左翼勢力による革命は、マルクス（レーニン）主義を奥底深く隠したまま、時として耳ざわりの良い言葉等を発し乍らやって来ると見るべきでしょう。

三、ラテンアメリカに見る間接侵略・革命

これからの日本並びに世界の左翼勢力の手口を考える場合、当然の事ではありますが、過去において彼らの行ってきた軌跡る辿り、そして学ぶことは必須の事柄です。ラテンアメリカは、御承知のように、アジアとも異なりますし、欧州その他の地域とも大きく異なっております。特にその歴史は異常です。しかし、このラテンアメリカのあちらこちらで行われた、又現に行われつつある、多くの左翼勢力の柔軟な政治戦略、その地域・社会にマッチした巧妙な革命戦略には、刮目すべきものが多々あります。それらは、現代における、そしてマルキストによる間接侵略・革命の注目すべき諸様相を呈示しております。そこで、これから暫くの間、お許しを得まして、ラテンアメリカにおける三つの代表的な例、即ちキューバ革命、チリ革命とそれに対する反革命、そしてニカラグァ革命について述べさせて頂こうと思います。

（一）キューバ革命

キューバは、北アメリカ大陸と南アメリカ大陸の中央に、ぽっかり空いたカリブ海に位置し、ここから戦闘機ならば、米国の東部・中部の略々全域を、長距離爆撃機や弾道ミサイルならば、米国全域をカバーできるだけに、そして又、米国資本の支配する重要地区の一画であるだけに、米国にとっては、政治・軍事・経済戦略上極めて重要な国です。

この国で、「武装革命方式」で戦って来た、カストロ主導の左派勢力が、時の政権（バチスタ政権）を打倒して、勝利を手中に入れたのは、一九五八年末日のことでしたが、実は真の革命はそれからであり、このキューバ革命は、或る意味では極めて奇妙な政治・社会革命でありました。

第一は、名実ともに革命の指導者「カストロ」が、この

勝利の五八年末迄は勿論のこと、マルクス・レーニン主義一派が、実際に権力を掌握して、「社会主義宣言」を発するに到った一九六十年四月迄は、「共産主義者」ではあるまいと、広く一般に信じられていたと言う事です。この八十年代末期の現時点に到ってさえも、この事を信じている多くの人々がいる位です。

第二は、あの過去においてソヴィエト社会主義共和国連邦キューバ支部であったところの、そして又、鉄の団結と規律を誇る「キューバ共産党」が、実は終始「平和革命路線」を取り続けていたと言う事です。最初の頃のキューバ共産党は、カストロ武闘集団とは、完全に無縁でした。が、その果敢・有力な戦いぶりを見て、これは「ものになるかも知れない」と考えるや、遂次に党員を潜り込ませ、「隠れ共産主義者、カストロ」の巧みな庇護のもと、着々と勢力を伸ばし、特にバチスタ政権打倒後の五十九年初頭からは、武装革命に功績のあった多くの人々を追い出し、更には傀儡として立てた新政権の首脳陣をも追い出し、共産革命に反対する多くの人々を死刑又は牢獄入りさせて、何時の間にか完璧な共産国家を作り上げて了ったのでした。米国は、端的に申すならば、この革命戦略・戦術を理解し得ず、かつての中共革命の時と同じように、カストロ左翼集団に暖かい風を送り続けておりました。好奇心や冒険心に富む米国青年がゲリラ戦に加わったり、マスコミ人が好意的な報道を伝えたりもしておりました。やっと目を覚ましたのは、右の大量処刑や中道・反左派分子の追放とともに、農地改革法が施行されてキューバ人地主達と一緒に米国資本の大農場（殆どが砂糖黍園）の悉くが接収・国有化されてからの事でありました。一方ソ連は、ツーカーの関係にあるキューバ共産党を介して遂次に影響力を行使し、瞬く間に最良の弟国・同盟国として了いました。

六十一年一月の米国のキューバ断交、同年四月の反カストロ軍のキューバ上陸作戦（失敗）、米ソ戦争寸前迄行った六十二年十月のキューバ・ミサイル事件を経た今日のキューバは、ラテンアメリカ全域の共産革命の拠点となっております。具体的には、破れたりとは言え南米チリの社共連合政権作りに一時成功し、中米ニカラグァでは新々共産政権作り（後述）に成功し、更に唯今は中米エルサルバドルで、果敢な武装闘争を強力に支援しつつあります。これらにはラテンアメリカ独特の歴史・社会事情その他がありますが、先きにも申しましたとおり、その柔軟な政治戦略、その地域・社会にマッチした功妙・果敢な革命戦略には、刮目すべきものが多々あります。次号からはその具体的な事象を述べさせて頂くつもりです。

韓国研修旅行に参加して

三田進平
（茨城県支部会員）

将軍の風貌

昭和四年生まれ（終戦時十六才）の私には、兵役の経験はない。気力・体力共に劣る私には、志願兵としての入隊も無理であったろう。したがって、今回の訪韓団の名簿を事前に受取り、その顔ぶれを知って内心ギクッとしたのが実情である。時代が変ったとはいえ、錚々たる軍歴・自衛隊歴の持主ばかりである。久し振りで直立不動の姿勢をとらなければならないのかなという考えが、ちらっと頭を掠めた。ところが、お会いしてみるとどの方も気さくに接して下さり、内心ほっとした。男の顔は自分で作るといわれているが、それにしても、お一人、お一人の現在までの錬成琢磨や教養、厳しさの裏づけがあっての穏やかな風貌に接し、これぞ完成された男の顔と思い、武士という言葉を思い出した。「日韓親善の夕べ」に出席された韓国側の予備役将軍たち、かつての朝鮮戦争で奮闘された方々もまた然りといえる。

前線部隊（愛妓峰）・空軍基地（清州）訪問

高速道路の一部には、有事の際緊急滑走路として使える個所がいくつかあるという。そこは道路が大巾に拡がっていて、そのうちの何か所かには航空燃料や弾薬・資材が備蓄されているそうだ。ドイツのアウトバーンもこのような発想のもとに造られたと聞く。日本は海に囲まれていて必要性は少ないかも知れないが、仮にこんな計画が発表されたら、今の消費税どころではなくさぞや大騒ぎになることだろう。

高速道路を除き、韓国の道路の両側には、どこに行ってもコスモスが咲き乱れている。聞けば、あの不幸な朝鮮戦争の忌わしい想い出を少しでも和らげるため、国の施策として植えたという。数か所の検問所を経て「愛妓峰」に着く。河を隔てて北朝鮮と対峙している。向う側の山には

「反戦、平和」というスローガンが書かれた看板があり、拡声機でこちらに向かって宣伝放送をしている。また平地には大きなアパート風の建物が散在しているが、人は住んでいないという。つまり「北では民衆はこんないい生活をしている」というデモンストレーションの一つらしい。

この研修旅行のメインの一つであった、水原の韓国空軍基地と米国空軍基地訪問は、両基地の部隊が振替休日となったため、清州の空軍基地訪問へと切り換えられた。米軍基地に行けなかったのは残念だったが、振替休日という言葉を聞き、何かほっとする気分にもなる。清州の空軍基地の建物の入口には、「先進精鋭空軍」と墨痕鮮かに大書してある。

ブリーフィングの後、基地内をバスで見学する。主力機であるF4ファントムが、敵の奇襲に対処するための抗堪施設である、厚いベトンで造られたかまぼこ型の掩体壕に一機ずつ納められていて、前線基地の緊迫感がじかに伝わってくる。休戦ラインを挟んで地続きだけに、いざという時、基地からの発進では間に合わないからということだ。また北鮮側では、グライダーによる低速・低高度侵入（ゴルフ場などに着地）の訓練をしており、これに対処するため韓国空軍ではジェット戦闘機で要撃する訓練をしているそうだ。マッハの時代にその意表をつく戦術もあるものだと思った。

空軍士官学校は広大な敷地に立派な建物が散在している。学生の憩いの場、レクリーエーションの場として公園があるほか、奥の方には教会や寺院まであるという。単に軍事技術、航空技術を学ばせるだけではなく、人格を磨く場ともしている事がうかがえ、感銘を受けた。

大韓航空整備工場では民間航空のほか米軍の航空機の整備をしており、F4やF15、F16の定期点検などが行われていた。沖縄や三沢など在日米空軍の航空機もここで整備されているという。対地攻撃機として、その流麗な姿態からは想像もできない獰猛なまでの火力を秘めているという、フェアチャイルドA10が、機首にバルカン砲を突き出したまま翼を休めていた。

わが国の防衛に思いを馳せる

ものの本によると、〝自存〟とか〝自衛〟とか、国家の最小限度の生存権を表す語句を用いながら、実はこれによって国力の強化をめざすとは、自衛の限度を逸脱した危険な思想であり、軍国主義・拡張主義につながるものであると言い切った元将軍がいたとある。

しかし、自分の健康は自分自身で守るのが大原則であるように、国の健康（平和）は自国の手で守るのが当然では

ないか。何年か前に、こんな笑い話を伝え聞いたことがある。アメリカ人特有のジョークかもしれないが「もう一度日本と戦争して、米国が負けて日本に守ってもらえば、税金は安くなり、個人個人の生活はもっと豊かになるのではないか」と。何と痛烈なアイロニーではなかろうか。

一週間にわたる今回の旅行から帰って、溜まっていた新聞の束をめくっていると〝奴雁〟という、初めて見る言葉が目についた。雁の群が餌を啄む時、中の一羽は首を伸ばして周囲の警戒にあたる。これを奴雁というのだそうだ。国民の大半は、自衛隊員が災害時の救援に活躍する時だけ、「さすがは自衛隊」などと頼もしがるが、日夜の訓練や装備の向上などには目を向けようともしないのが普通ではないだろうか。防衛費がGNPの一パーセントを出るか出ないかで大騒ぎになるお国柄、たかが消費税ごときで(怒られるかな)国政が揺れ動き、今やパチンコ国会も現出されようとしている。何と優雅に、かつ安逸に平和を貪っていることであろうか。旧軍では、お返しをされることを「反動をとられる」と言っていたそうだが、このままでいたら、いずれ大きな反動をとられる時が来るのではないだろうか。

自衛隊を奴雁にたとえるのは甚だ失礼とは思うが、自衛隊のみならず、隣の韓国の緊迫度の高い防衛態勢、そして同盟国も、わが日本のために奴雁の役割を果してくれている気がしてならない。

消防車も救急車も出番がないのが一番よいことなのだが、いざという時に備え訓練や整備は不可欠だろう。

バスガイドの語るひどい話

バスガイドの崔さんは北朝鮮生まれで、朝鮮戦争当時、難民として南へ逃れて来たという。日本にもいたことがあり、日本人と変らないくらい日本語がうまい。今から十数年前、やはりガイドとして添乗した時の話を次のようにしてくれた。

当時、韓国では米が不足していて、政府は品質は劣るが収穫の多い米の生産を、国の施策として行っていた。その時の日本からの団体は、世界にその名(悪名?)を轟かしつつあった〝農協さん〟であったそうだ。その中の一人が、「こんな米、まずくてとても食えたものではない」というので、崔さんは、違法ではあるが、とっておきの米を炊いてきて食べてもらったという。この話を聞いて、何という驕りであるのかと、同胞として内心忸怩たるものがあったと同時に、自分自身の昨今の生きざまを省みて、頭に冷水を浴びせられた思いであった。

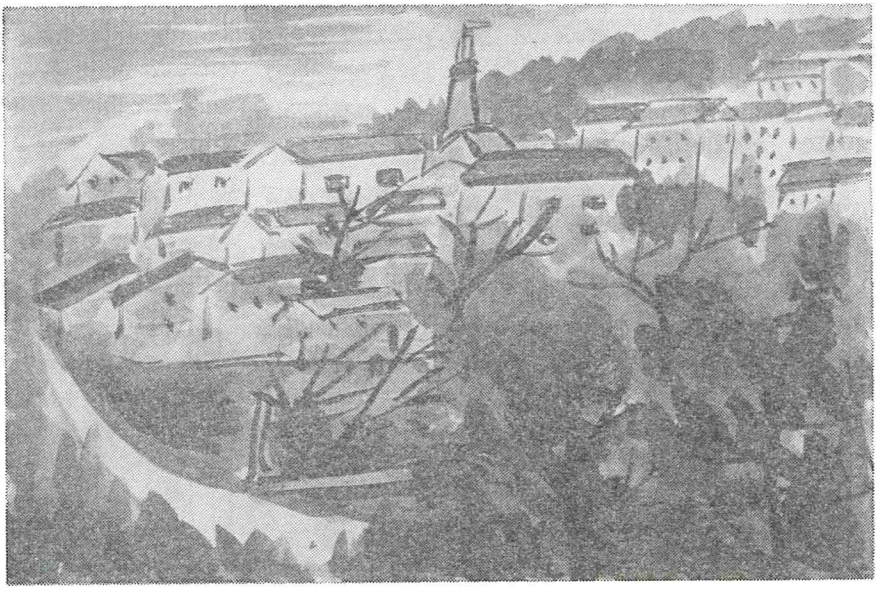
ニューギニヤやビルマの戦線をはじめ、多くの前線で、

木の根・草の根も食いつくし、飢えと病で幽鬼の如く戦場を彷徨し、遂に朽ち果てた将兵は如何なる思いであったろうか。太平洋戦争における軍官民の犠牲者は三百万人と聞く。その犠牲の上に立っての今の平和と繁栄があるというのに、それにどっぷり漬かっていることが、砂上の楼閣のような気がしてならない。

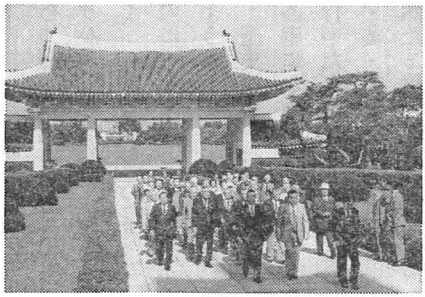
歴史にＩＦはないといわれているが、もし八月十五日が終戦にならず、ずるずると日本が本土決戦にのめり込んで行ったとしたら、わが国は米ソによる二分割どころか、米・英・支・ソにより四分割されたかも知れないと、私は慄然たる思いがした。

以上、今回の研修旅行に参加した私の感想を、拙い文で述べさせて頂いたが、特筆すべきは、旅行中、主にバスの中での矢部副理事長の解説であった。朝鮮戦争の詳細な戦史をはじめ、遠く新羅・百済までに遡り、わが国と朝鮮半島との関わりなどについてのレクチャーが行われたが、豊富な知識、人間ばなれしているような記憶力（過去の年月日、人名、これも日本語読みと韓国語読み）には全く恐れ入った。矢部さんのお話が聞けただけでも、今回の研修旅行の意義の大半が満たされたような気がしている。

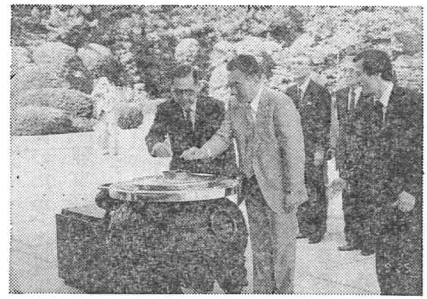
今後は、他から与えられている寧日を無為に過ごすことなく、残された人生を私なりに有意義に過ごしたい。



（広瀬ふみ子先生画・日本水彩画展入選作家）

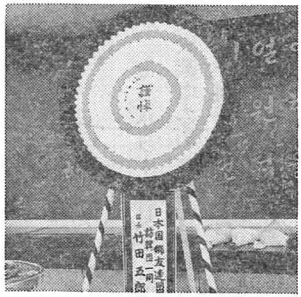


ソウル金浦空港から直路
「国立墓地」へ向かう



「顕忠塔」の前で焼香する
竹田団長と堀江会長

霊前に捧げられた花輪



韓国在郷軍人会長・蘇俊烈将軍の挨拶

海兵隊の最前線陣地「愛岐峰」を訪問

郷土の城（30）

米沢城

佐々木信四郎
（城郭学者）

一、米沢の地

この地は最上川の上流、米沢盆地の南方に位置している。

南に吾妻連峰の山々を始め、三方が山で、やや不便な感も当時はあったが、南羽前の中心地であった。

鎌倉幕府の地頭職であった大江氏は康暦二年（天授六年・一三八〇）伊達宗遠に滅ぼされ、以後この地は伊達氏の支配下となった。

十五世伊達晴宗は天文十七年（一五四八）に本拠をこの米沢に移した。

晴宗に続く十六世輝宗、十七世政宗は、戦国大名として米沢を核にして勢力をつけ発展していった。

伊達政宗は天正十八年（一五九〇）に秀吉により岩出山城（宮城県玉造郡岩出山町）に移され、翌十九年米沢をあとにした。

伊達氏の旧領を与えられた蒲生氏郷（うじさと）は会津若松に入城し、米沢には氏郷の部将蒲生郷安を入れた。

その蒲生氏も慶長三年（一五九八）宇都宮に転封され、代って越後より上杉景勝会津百二十万石で入部することになり、米沢は上杉氏の重臣直江兼続（かねつぐ）が入城した。

二、上杉氏の入城

慶長五年（一六〇〇）に至り、豊家五大老の筆頭徳川家康が、これも五大老のひとり上杉景勝に大坂城へ来るよう要請したが、景勝は国表にとどまり、景勝謀反の心ありと、家康は上杉征討の軍を起した。

これに呼応して石田三成も挙兵し、関ヶ原の戦となった。

戦は東軍徳川方の大勝に終り、西軍の首謀者のひとり上杉景勝は会津百二十万石を没収され、米沢三十万石に削封されて、慶長六年米沢へ入部した。

米沢城へ入った景勝は、城の修復にとりかかったが、家臣団もそのままつれてきたため、大削封のための財政難に

陥り、なかなか意のようにはいかなかった。

本丸を中心に、周囲を方形の二の丸で囲み、水濠としたが、土塁をもって築き、石垣はなかった。

慶長十三年頃より直江兼続の縄張りによって、西側に堀館川（堀立川）をうがち、東の松川とともに外堀の役目とした。

さらに拡張を行い、三の丸をもって囲み、ここに重臣を置き、下級武士はその外に、町屋は外堀より外に住まわせた。

また侍屋敷を西に拡大した。

天守は財政難と、徳川家に対する遠慮から築かれず、御三階櫓と称する三層櫓をもって天守に代え、建物も質素であった。

また城の東と北には寺院を連ねて寺町として、隠密裏に城の戦略的防衛とした。

外様大名の中央権力に対する防衛意識である。

三、近世の米沢城

もともと窮乏に迫られていた上杉家であったが、三代藩主綱勝は寛文四年（一六六四）に急逝して継嗣なく、豊臣恩顧の外様大名として危機存亡のときであった。

ここに吉良義央（忠臣蔵で有名）の長子を藩主に迎え、四代綱憲となり、存続は認められたが、領地は十五万石に削られてしまい、上杉家の悲境は続いた。

九代上杉治憲は、もともと日向高鍋藩秋月氏の次男で、上杉重定の養子となり、上杉藩主となると、この窮地から脱却しようと藩政改革を大断行し、この雪深い風土に養蚕と織物を奨励し、米沢織の基礎を作り上げ、数々の善政によって藩財政は次第に豊かさを増してきた。この九代治憲が上杉鷹山と号し、中興の祖として敬まわれている。

十二代斉憲は文久三年（一八六三）には京都守護職となり、戊辰の役には奥羽列藩同盟に与して幕府方につき、薩長軍に対抗したが、利あらず、蟄居を命ぜられた。

十三代茂憲のおり、版籍を奉還して、上杉家の居城米沢の使命は終った。

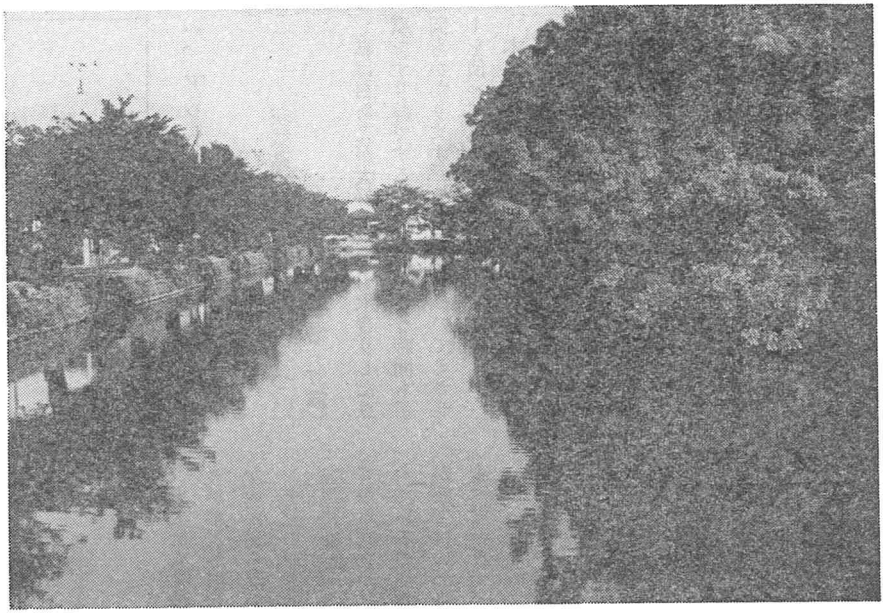
四、現在の米沢城

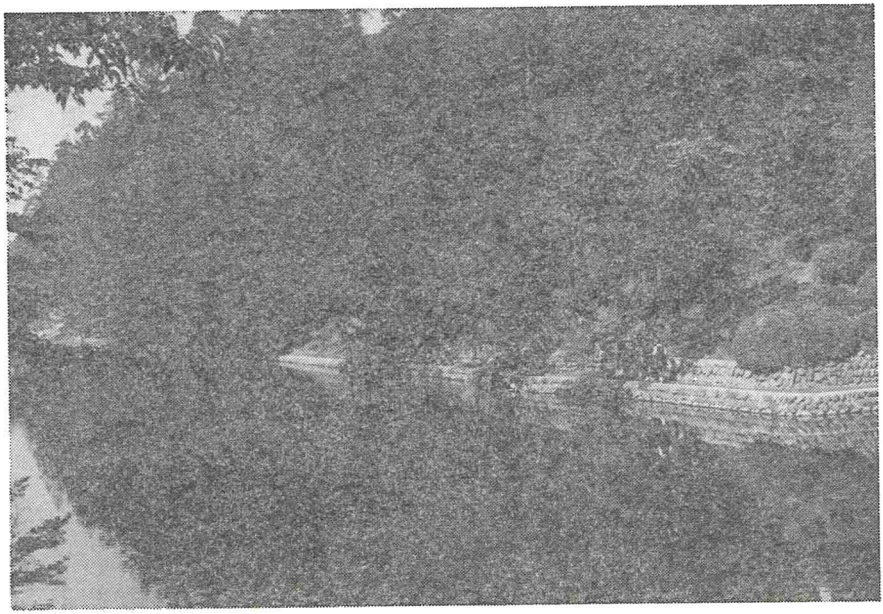
明治六年城の建物は取り除かれ、本丸の土塁と水濠が現存している。

本丸内には上杉神社が造営され、「上杉まつり」には武者行列などがくり出され、稲富流砲術隊の実演など、雪から開放された市民たちは遅い春を謳歌する。

鷹山以来の米沢織は現在でも重要産業となり、「お鷹ポッポ」の郷土玩具も素朴な姿で町おこしに一役買っている

また米沢牛は最近の名物である。城趾は県指定史跡で、春の桜とともに秋の紅葉もまた一段と美しい。





（県指定史跡）
本丸の濠と土塁を残し，往時の面影はうすれてしまった。紅葉が美しい。

生活の知恵

一、アットいう間においしい白あえ

茨城県古河市　茂田　みつい（主婦・37歳）

私は白あえが大好き。でも水きりした豆腐をすり鉢でするのは、けっこう時間も手間もかかります。そこで思いついてミキサーを使って見たら大成功！

木綿豆腐は水きりせずそのままミキサーに入れスイッチオン。最初は下の方しか豆腐が混ざらないので五～六秒で止め、まわりについた豆腐をスプーンなどで下に落としてまた五～六秒。適量の塩、砂糖、しょうゆ、出し汁を入れ、さらに五～六秒。あっという間にクリームのようにとてもなめろかなあえ衣のできあがり。あまりの早さとおいしさに感激です。

二、色よくすぐ揚がるてんぷら

埼玉県北葛飾郡　横須賀　礼子（主婦・49歳）

大人にも子供にも喜ばれるさつま芋、じゃが芋、かぼちゃなどのてんぷらはなかなか火が通らないのが難点。そこで私は二センチ位の厚さに切って、重ならないようにお皿に並べ、電子レンジに五分くらいかけてから衣をつけて揚げます。中身は火が通っているので衣が揚がればできあがり。わが家ではいつも厚いさつま芋のてんぷらを食べています。

三、じゃが芋のヘルシーケーキ

東京都東村山市　矢川　浩子（無職・28歳）

卵の泡立てもバターのかくはんもなく、オーブントースターで簡単にできるケーキです。

材料：ゆでて粗くきざんだじゃが芋100グラム。サラダオイル50グラム。砂糖30～50グラム。塩ひとつまみ。卵一個。

作り方：材料をボールに入れ、よくかき混ぜます。次にベーキングパウダー小さじ1と小麦粉100グラムをふるってから加え、練らない程度に混ぜ、アルミ箔を敷いた皿に流し入れて、オーブントースターで約10分焼きます。あら熱がとれたら包丁で切り分けていただきます。

四、古スカート裏地の活用法

福島県須賀川市　栗木　康子（主婦・54歳）

古くなったり、小さくなったりしてはけなくなったスカートの表地は、座布団にしたり、こたつの上がけに縫い合わせて活用したりしましたが、裏地はツルツルしているので活用せず、捨てていました。

あるとき思いついて裏地をハンガーカバーにしてみたら大変使いやすく重宝しています。服の上にかけても軽いし、カサばらないし、ツルツルしてごみもつきにくいので、ぜひ作ってみて下さい。

（朝日家庭便利より）

郷友基金

醵金者ご芳名

（通算第8回目）（受付順 敬称略）

（石川県支部扱）

森　婦美子

（京都府支部扱）

十万円　吉田　信雄

○―○―○

敬弔

連盟顧問

白銀重二殿

（元・11・20）

本部だより

一、十一月十五日、十六日にわたり連盟本部主催、長崎県支部担当の婦人部全国研修会が佐世保市で行われ、堀江会長、味岡理事長、岡田婦人部長が参加致しました。十八支部から合計六十二名が参加し、研修会、佐世保地方総監、岡部海将の防衛講話、懇親会、護衛艦「まきぐも」による体験航海、佐世保教育隊の見学等が行われ大成功に終りました。

一、防衛講演会

十一月十六日熊本県支部、十二月十六日静岡県支部主催の防衛講演会が行われ、堀江会長が防衛問題について講演を行い、多数の参加者に感銘を与えました。

一、常務理事会

十一月二十二日及び十二月六日に常務理事会を開き、特に平成二年度事業計画の構想を審議しました。

一、在京理事会及び懇親会

十二月十三日に在京理事会及び懇親会を開き、本年度事業実施の反省と平成二年度事業計画構想の審議を行いました。懇親会においては特に堀江会長の叙勲に対し一同から祝意が表されました。

一、堀江会長叙勲

昨年秋に行われた叙勲に於て、堀江会長には「勲二等旭日重光章」授与の栄に浴せられました。ここに読者の皆様と共に心からお祝詞を申し上げる次第であります。

（味岡理事長記）

"新兵さん"の一日(番外篇シリーズ㊽)　連載(125)

自衛隊今は昔の物語

牧野良祥(前「翼」編集長)

ショートル市場のガキ大将

―ガキ大将の本領―

うたた寝から覚めて、次第に意識がはっきりしてくるにつけ、まわりが妙に静かなのは落ち着かないものである。しかも、そこは初めてやってきた異国人の家である。

(そうだ、母さんも心配してる。家に帰ろう)急に里心のついたおいらが腰を浮かしかけたとき、庭の方で人の声がした。

庭に出て、人の気配のする方を見ると、門のところに四、五人の腕白どもが、家の中をのぞきこんでいる。よく見れば、さきほどおいらが大立廻りを演じたあの悪ガキどもではないか。

連中は、庭に出たおいらに気付くと、全員がギョッとした感じで、一旦は物陰に姿をひっこめたものの、一人また二人と次々に顔を出し、こちらの様子をうかがっている。

まるでマンガ映画を見るような連中のそんな格好がおかしくて、おいらが思わずニヤリとすると、連中もつられてニヤリとした。調子に乗ったおいらは、そこが他人様の家であることも忘れ、家の中に入って来いと手招きをしていたのである。

この日の出来事がきっかけとなり、おいらの生活はまたまた一変することとなった。男、つまり張さんの家にいりびたりとなったのである。張さんには子供がなく、奥さんと両親の四人家族で、召使いが何人かいたように思う。

おどろいたのは、張さんの母親が纏足だったことである。纏足というのは、中国唐代に始まったといわれ、女児が四、五才になると足に長い布を巻き、第一指以外の指を足裏に折りこむように固く縛り、足を大きくしないようにする風俗であり、このため成人しても子供のような小さなくつをはき、ヨチヨチとしか歩けないのである。

当時の満州では少なくなっていたこの纏足の老婦人は、特においらをよく可愛がってくれた。それをよいことに、ついには張さんの家で三度の飯を喰い、おやつをもらい、疲れたら昼寝までするという始末。

そのうえ、チビで大陸的風貌のおいらは、レイの悪ガキどもにとけこみ、朝の餅売り商売が終るやいなや、張さんの家を根城に、終日遊び暮らした。

メンコにビー玉、そして悪ガキどもを引きつれ戦争ごっこまでやったのだから、ガキ大将としてはこたえられない。

おいらは、またしても満州が気に入ったのである。

(航空自衛隊連合幹部会特別顧問・元一佐)

牛乳茶碗むし，そぼろあんかけ

堀江　泰子（料理研究家）

材　料

卵	2コ
鶏ひき肉	50g
牛乳	2カップ
生姜みじん	小さじ2
塩	小さじ½弱
出し汁	3/4カップ
しょうゆ	小さじ2
みりん	〃
酒	〃
グリンピース	少々
片栗粉	小さじ2
水	大さじ1強

茶わんむしのだしの代わりに牛乳を使って作りましたので，手間が大変かんたんで，しかも，だれも牛乳を使ったとわからないおいしい味に仕上がります。具の入っていない茶わんむしですから，すぐにむし器でむして，その間にそぼろあんを作るのです。生姜をきかせたしょうゆ味のそぼろあんをかけるので，一層おいしいのです。

作り方

① 卵はほぐし牛乳，塩を加えて混ぜこしておく。

② 器に①の卵液をそそぎ，蒸気の上った蒸器に入れ，蓋をし初め2～3分強火あと火を弱めて15～20分位むす。（竹串でさしてすんだ汁が出ればよい）

③ 鍋に鶏ひき肉，生姜みじん，しょうゆ，酒，みりん各小さじ2を入れてよく混ぜてから火にかけひき肉がパラパラになったら，出し汁を加えて煮立て，グリーンピースを加えアクを取り，水どき片栗粉でとろみをつけそぼろあんを作る。

④ むしあがった茶碗むしの上に，そぼろあんをかける。

（とりあんの代わりにえびあんもおいしい。背綿，殻を取りあらく切り，酒，塩をして下味をつけて片栗粉をまぶし，出し汁に調味した中でさっと煮，水どき片栗粉でよいとろみをつけかける。小口切りの三つ葉をのせつゆ生姜をおとす）

戦史物語

興津坐漁荘の警備（一）

森松俊夫
（軍事史研究家）

坐漁荘

西園寺公望の別荘坐漁荘が完工したのは大正八年九月であり、西園寺がパリ平和会議から帰朝後、同年十二月から興津の住人となった。

興津海岸は、清見寺の晩鐘を頭上に聴き、南は清見潟を抱き、東南に伊豆半島を、西に遠州を遠望し、三保の松原は眼下に横たわり、清水港の形勝双瞳に入る東海十勝の一として世に知られたところである。西園寺は

「庭は清風荘。眺めはここが一番よい。三保も伊豆も邸内にあるようだ」

と語っている。清風荘は京都市田中にあり、公望の生家徳大寺家の別荘を修理したもので、庭の粋は別荘中の第一の定評があった。本邸は東京の駿河台で、中央大学に隣接していた。

坐漁荘の雅名は、名付け役を承わった渡辺千冬子爵が「呂尚が茅に坐して漁釣した故事に因み、太公望と公望を通わせ、王者の師賓が東海のほとりに在ったのを、東海道の興津と取り合わせ、坐茅漁荘とするのを坐漁荘と略したもので、清廉という意味である」と進言し、用いられたという。

敷地は約千坪、母屋の建坪面積は約百坪の二階建、別棟に石造倉庫、警護の警察官詰所、執事室、使丁部屋等があり、すべてが質素な建物であるが、路地の景物と調和し、瀟洒な趣味がうかがわれた。

御殿場にも山荘があった。東田中の、雑木林と植林に囲まれた幽遠な一画である。この別荘が完工したのは大正十一年六月。箱根全山を眺め、蟬時雨に涼味を呼び、蜩の声に暮れる野趣たっぷりの山荘。近くに便船塚があったことから便船塚別荘と呼ばれ、夏の避暑のため使用された。

西園寺が官職についたころ、しきりに往来していた那須や大磯の別荘は、その後、使用していなかった。

西園寺は、大正元年十二月、内閣総理大臣を辞任したとき、とくに前官の礼遇を賜わり、また、いわゆる元老として天皇を補弼するようにとの勅語を受けた。大正三年には、政友会総裁を辞し、同八年、パリ講和会議全権委員の任を果し、山県・松方両元老逝去後は、最後の元老としてその大任にあたっていた。

西園寺は、政治家であるとともに洗練された文化人として、和漢洋学の造詣が深く、とくに漢学を好み、フランス語は練達で、博識博読であった。趣味は、詩文、俳句、書道、南画、撞球等であったという。

一人の私服警察官

西園寺が坐漁荘に永住することになった大正八年末から、私服の警察官一名が、江尻警察署から派遣され、五日交替で警備にあたり、日当二円五十銭が支給された。私服といっても、和服に袴という恰好で、詰所に待機し、来訪者があると出て行き、玄関まで案内した。

昼間の勤務は、西園寺の外出の際の警護と、邸を二、三回巡回するぐらいで、夜間は二、三回邸の内外を巡察する程度であった。

外出というのは主に散歩である。西園寺は、着物を着流し、黒竹の杖に、鳥打帽、下駄履きという軽装で、昼間は、別荘西方にある西農園付近へ、春や秋の気候のよい夕方は、毎日のように興津駅付近まで散策した。このとき、警察官は、約百五十メートルぐらい後方から随従した。

当時、西園寺は七二歳で元気よく、毎日散策に出掛けた。時には警護の巡査の来るのを待って、いろいろ雑談することもあった。とくに温順な者に目をかけ、散策の途中にみずから本屋で購入した本が読み終ると、その本を与えて労をねぎらった。

警備主任制度となる

大正十年十一月三日、時の総理大臣・政友会総裁原敬が、東京駅頭で、中岡艮一の兇手に斃れた。このときから、坐漁荘の警備がにわかに強化され、警部の警備主任以下九名が派遣された。

警備主任は日勤で、巡査部長以下巡査は各四人あて二組に分れて隔日に勤務した。全員私服で、目立たぬよう、防具はステッキまたは十手を持っていた。

勤務方法は、昼間は正門に一名、裏海岸付近一名が立哨し、移動しながら警戒し、一名は詰所に配備、一名は休憩という態勢であって、夜間もほぼ同様であった。ただし、門は、昼間は開けておいたが夜間は閉鎖した。(当時、哨舎はなく、これが設けられたのは昭和七年六月である)

西園寺は老齢にかかわらず頗る元気で、相変らずよく散策に出掛けた。このときは警備主任が身辺に付き添い、他の二、三名が目立たぬように前後を固めた。

また政治家など面会に来るものが多く、新聞記者や右翼団体の者も来る状況であるが、執事や秘書は東京本邸か京都清風荘におることが多く、したがって警備主任が来客の応接にあたり、極めて多忙であった。

主任は、訪問者のうち取りつぎをするものと門前で謝絶する者とを見定めることが大切であり、ときには元老の玄関番の経験もし、政界人の人情の機微にも触れた。このため、隊員の政治経済に関する教養にも心を砕いた。

しかし興津における警備は、平穏であり、他にくらべれば、長閑な方であった。警備人員も世相の変遷推移により、多少の増減があった。

西園寺は、春は京都の清風荘、夏は御殿場便船塚別邸、秋は駿河台本邸、残余は坐漁荘に住していた。

大正十二年も例年どおり、七月中旬から九月中旬までの予定で、御殿場に避暑していた。警備は大体坐漁荘と同じであるが、邸が極めて広大で、地形上からも警備には苦労が多かった。

九月一日、関東大震災に逢った。新築家屋ではあったが、家根瓦は全部落ち、家は

大きく傾斜して柱や障子はよじれ、邸内詰所も亀裂が生じ、惨澹たるものであった。

西園寺が、屋内から這い出し、裏口に坐っているところに警備主任が駆けつけ、付近の藪のなかに連れてゆき、畳を三枚ほど敷いて休んでもらった。

主任は、電信、電話、鉄道が不通なので、やむなく藪を仮りの宿とした。三日目、ようやく道路の仮橋ができたので、自動車で西園寺を沼津まで案内した。沼津に来てみると、鉄道が開通したので、これ幸いと乗車し、興津に送りとどけた。

坐漁荘でのざわめき

大正十三年春、清浦内閣を奏請した。このころは、いわゆる護憲三派運動で世論が喧しかった。院外団二十余名が決議文を携え、興津に押し寄せるという情報により、江尻署は巡査の全力で警戒にあたった。

院外団が到着し、門前で小競合いがあったが、警備主任は検束することなく追払えという方針で応待し、決議文を取りついだことにして、無事に退散させた。

昭和五年十一月四日、浜口首相が東京駅で佐郷屋留雄に狙撃されて重傷を負い、翌年四月辞職したので、西園寺は民政党顧問若槻礼次郎を首相に奏請した。

滞京二ヶ月半、この間の来訪者は約七五〇名もあった。七月、避暑のため西園寺は御殿場に移ったが、来訪者が多いので、一旦、京都に移ってから興津に帰った。

六年十二月、若槻内閣が総辞職すると、急ぎ東京本邸に入り、ついで参内して御意を拝し、宮中で牧野内大臣、一木宮内大臣鈴木侍従武官長と後継総理大臣について意見を交換したのち、政友会総裁犬養毅を奏請した。このときの滞京は短く、四日目には興津に帰邸した。

昭和七年二月九日、井上日昭を中心とした血盟団の一人小沼正が、前蔵相井上準之助を拳銃で射殺した。これからテロ事件が頻発し、重臣の身辺も厳重な警戒を必要とするようになってきたのである。

坐漁荘は、さきの浜口狙撃事件後、特別専務員二名を設けた。専務員は、興津滞在者中、西園寺にたいし不隠な行動に出るおそれある者の潜入を察知し、容疑者の早期発見に努めるものである。一名は興津巡査部長派出所で勤務し、他の一名は坐漁荘警備専務員があたった。

二月八日、血盟団の一人池袋鉦八郎は、井上日昭からブローニング拳銃と実弾二五発を手交され、西園寺暗殺の使命を帯びて来興、坐漁荘近くの清見寺に静養と称して起居し、富士川尻で拳銃の試射まで行ない、二月二十日まで滞在した。

その間、清見寺住職を通じて熊谷執事と三回面接し、機会をねらっていたが隙がなく、暗殺を断念して退散した。まさに危機一発というところであった。

西園寺は、三月五日から十八日まで東京に滞在したが、上京の途中、大船駅で、三井財閥の団琢磨が、血盟団員菱沼五郎に暗殺されたとの情報が入り、厳重な警戒体制がとられた。

熊本県支部だより

教育勅語奉戴百年に当りて

会長　矢野正俊

国は教えありて存し、教えは人によりて行はる人は国ありて安し、三者は一なり

国家をして国家たらしめ、人を人たらしめる「教え」の圧巻を教育勅語に仰ぐことが出来る。教育勅語は明治二十三年十月三十日に発布されたものであるが、其の時期に畏れながら明治天皇が始めて御発案なされたことを書かれたものでなく、日本の国体と歴史を要約遊ばされたものである。それ故教育勅語は日本と共に無窮であり、昭和二十三年に国会がGHQの強圧に屈して廃棄の決議を行っても、今なほ教育勅語の精神が存し、数多くの団体、教団、学校、家庭において、寧ろ終戦迄以上に強調され、教育勅語の教育が行はれていると云うことは当然のことである。

熊本県人として教育勅語に関連して忘れ難いのは、明治天皇の侍従元田永孚（ナガザネ）先生の事である。元田永孚先生は文政元年（一八一八）一〇月一日熊本の山崎町に生れた。十一歳で藩校時習館に入り先輩横井小楠、家老米田是容と共に実学党の一人であった。藩はこの偉材を見逃さなかった。当時大久保利道はお若い明治天皇の帝徳輔導の人物を求めて居た。明治四年五月末宮内省出侍、侍講を拝命、初めて天皇に論語を進講した。

至上の親任を得て、彼は平生養うところの総てを傾けた。特に功績顕著なのは教育面に於る働きで、幼学綱要を撰進したが最大の功績は教育勅語である。欧化と国粋の対立から教育の基準が失われているを憂えられた天皇は、徳育の基礎となるべき要綱を編集せよと命ぜられ、政府はその起草を熊本県出身で時の法制局長官井上毅に命ぜられた。元田、井上の二人は協力完成奏上ののち明治二十三年十月三十日、首相山県有明と文部大臣に親授せられた。これが以後六十年間、大東亜戦争終戦までわが国教育の基本となった「教育に関する勅語」である。

和歌山県支部だより

自衛隊和歌山地方連絡部は本年創設三十五周年を迎え、十一月五日和歌山東急インに於て記念式典を実施され各界代表者等多数参列県支部からは佐伯支部会長代表して列席した。

式典後写真家の柴田三雄氏の「世界見たまま二十年」（見えてきた二十一世紀）と題され記念講演有り、引き続き和地連友の会主催の祝賀会が盛大に行なわれた。

富山県支部だより

富山県護国神社秋季大祭参拝

富山県護国神社秋季大祭は十月二十五日午前十時より厳かに斉行せられ、県下各郡市町村の郷友会は会旗を掲げ午前九時より神社境内に逐次集合し、我等の先輩殉国の英霊、明治戊申の役より日清、日露の戦いを始め満洲事変、上海事変、支那事変へと発展し、未曾有の大東亜戦争に至るまでの郷土出身の御英霊二八、六七三柱の忠烈を仰ぎ、慰霊崇敬の誠を献げ、県民の参拝者

も折柄の恵まれた晴天を喜び合い、近年稀なる多数の参拝者が参集している中に於いて、郷友会旗を林立して午前十時より神社大鳥居前に粛然として参拝している富山県郷友会の参拝の隊列は神社大祭の異彩であった。

大祭は定刻午前十時より斉行せられ、来賓として富山知事代理以下県下各界代表、戦友団体代表、遺族代表有志、自衛隊富山地方連絡部長、陸上自衛隊第三二一施設隊長兼富山駐屯地司令他数十名の来賓の参列があり、祭典の次第は神社宮司栂野守雄氏修祓の儀、献饌の儀より始まり、次に音吐朗々として拝殿内に響き渡る栂野宮司の祝詞奏上は明治以来の防人として祖国のため斃れたる英霊の忠烈に感銘し、落涙する者多く感慨無量なるものあり。此の時刻に併せて富山県郷友会は副会長若林直一氏の指揮を以て会旗を先頭に発進拝殿前に整列し最敬礼を捧げ、遺族を始め参拝者一同の盛大な拍手を浴びる。玉串奉奠となり、宮司以下祭員一同、来賓各界代表呼名の順序に従い神霊の大前に恭しく玉串を奉奠する。郷友連盟副会長瀬川時造、県支部会長大野俊雄の二名も指名されて玉串を奉奠し、連盟会員を代表して神霊に敬仰感謝の赤誠を捧げた。玉串奉奠を終り白山比咩神社舞姫二人の浦安の舞の奉納があり、次に富山県詩吟剣舞連盟より「千島慕情」と題する詩吟が厳かに奉納され、富山県銃剣道連盟より銃対刀の模範型が高盛教士対舛田教士によって奉納され、続いて撤饌の儀神楽奏上の儀を滞りなく終了し壮厳盛大なる裡に秋季大祭を終った。

猶一般参拝者の御神前にぬかづく参拝は打ち振る鈴の音と拍手参拝の行列は午后五時までも引き続き、天候にも恵まれて神社は終日賑い、県民の忠霊を慕う至情は大いに盛り上り遺族の方々も感動せられた盛大さであった。

祭典終了と同時に午後零時より境内に於いて日本郷友連盟富山県支部、富山県軍恩連盟、富山県銃剣道連盟、隊友会富山県支部連合会、北日本新聞社が共催で第二十六回富山県護国神社奉納武道大会が開催された。次第は先づ富山県郷友会長大野俊雄氏より開会の挨拶があり、来賓を代表して自衛隊富山地方連絡部長松浦征七一等陸佐より祝辞が述べられ、審判長高嶋義尋氏より試合上の注意事項が述べられ試合戦に入る。試合は平素錬磨の実力を遺憾なく発揮され、肉弾相搏つ白兵戦の実戦さながらの接戦は満場の観衆の拍手喝采の声援を受けた。団体戦は自衛隊Aチームが優勝した。四十五歳以下の試合においては立山支部のAチームBチームが其のチームワークに於いて勝利を獲得し、四十六歳以上の個人戦は優勝長岡進次氏、次勝は宮村隆之氏、三勝は岩木正明氏が夫々勝利を獲得、四十五歳以下の試合に於いて個人戦、優勝は金山豊氏、次勝は高盛作義氏、三勝は塚田日出雄氏が夫々勝利を獲得し、是等の優勝、次勝、三勝には夫々賞状賞品が授与され其の栄誉が讃えられた。閉会の挨拶は瀬川理事長より述べられ、将来の錬磨と発展が期待され、最後に松浦自衛隊地連部長殿の主唱で万歳を三唱し大会を終る。

山梨県支部だより

山梨防衛連絡協議会設立準備会の開催については、十月号「山梨支部だより」（郷友五八頁）に掲載したとおりであったが、

本番の設立総会が十一月三日農業共済会館大ホールに於て、日本郷友連盟山梨県支部、隊友会山梨県支部、戦友団体四十八団体、自衛隊父兄会並びに募集相談員、隊友会OB会等二百五十名出席し、来賓には臼井県議外一名の県議、各国会議員秘書、自衛隊地方連絡部長、北富士駐屯地業務隊長、前地連玉川部長のご臨席を得、山梨県知事、甲府市長、国会議員其の他数々の祝電を戴き盛会裡に開催された。

当日の人寄せ余興として「自衛隊富士学校音楽隊の演奏が行われた。初めに当り一同起立、演奏に合せて国歌の斉唱、続いて明治、大正、昭和の懐しい歌曲、全国各地の民謡、最後に甲斐の代表武田節、アンコールに答えて勇壮の軍艦マーチの演奏に一同聞き入った。

一時半より設立総会となり、

一、開会のことば
二、護国神社に奉祀した二五、〇二八柱に黙禱
三、発起人代表挨拶
四、経過報告
五、議事
1、会則の承認
2、役員の承認
3、会長の挨拶（新会長議長にて）
4、事業計画
5、予算案
6、其の他
イ、明春四月又は五月総会の開催
ロ、七月八日（日）を目標に防衛講演会開催

右の順序に進行され、本会趣旨徹底のため、坂本幹事より趣意書の朗読、特に発起人代表の挨拶には①極東の日ソ関係、中共の天安門騒動、東独逸の三十万人デモ行動等何時飛火の来ないとも限らない。国内情勢では参議院選の惨敗に伴い、土井構想に基く安保、自衛隊等の取扱いより、自らの国は自らの手で守る責務、即ち国防思想の普及の重要性、②四十余年平和で自由で豊かな日本の国ずくりの蔭にある二四六万余柱の犠牲が有ったことに鑑み、英霊に感謝を捧げて慰霊顕彰の実現、③前二項目の後継者の育成等が強調された。

承認された役員は次の通り。

会長　原　貢（日本郷友連山梨県支部会長）
副会長　山岡佳年（県郷友連副会長 隊友会長）
同　矢崎　忠（軍恩連盟会長）
理事　参加各団体長
幹事　坂本規光
同　日向昭三
監事　長田　静
同　川手嘉久

設立総会終了後小休憩の後、二時四十分より、前参議院議員、元陸将自衛隊西部方面総監、日本郷友連盟会長堀江正夫先生の「日本の安全保障とその問題点」と題して防衛講演会が行われた。国際情勢、国内情勢の現況、国会運営特に国防問題についての熱弁に聴衆一同感激し、一時間二十分の持時間を延長して続行をとの声に答えて更に五十分延長講演を聞き、一同感激を更に深くした。五時より堀江先生を囲んでの懇談会、更に宿舎に案内して陸士同期生、会の役員等夕食を共にし、話題もつきないが設立総会の全日程を終った。

（写真次号）

社団法人日本郷友連盟本部業務分担表

平成元年十月二十六日

会長	堀江正夫
副会長	松本明重、瀬川時造、上杉源之、赤羽根澈、味岡義一、岡田玲子、香取穎男、佃藤吾
理事長	(兼)味岡義一
副理事長	矢部廣武
事務局長(出納責任者)	野間康一

(業務)	(担当理事)	(副担当、協力理事)	備考
総務、人事、事業、組織、郷友誌、名簿、広報、顧問会	味岡理事	矢部、古賀、五十嵐、野間、各理事	
組織の拡大、強化	松本(明)理事	味岡、矢部、福岡、古賀、前川、各理事	
参与会	香取理事	矢部、福岡、前川、各理事	
財務、後援会	松本(明)理事、佐藤理事(全般)	味岡、佃、大河内、各理事	
経理、予算、福祉	佃理事(経理部長)	六反園(文)、野間、各理事	
郷友基金	香取理事	佃、佐藤、柏木、各理事	
英霊の顕彰、表彰、叙勲、スパイ防止法	梅野理事	最上理事(英霊の顕彰)、柏木理事	
防衛問題、自衛隊、民防、郷土防衛	柏木理事	古賀、福岡、五十嵐、各理事	
防衛思想の普及	柏本理事(全般及び防衛講演会)	味岡、五十嵐、前川、各理事(郷友トップセミナー)	
機関誌「郷友」	赤羽根理事(編集) 柏本理事(企画、原稿、販売、管理)	矢部、後藤、各理事(防衛講座、郷友塾) 味岡、佃、佐藤、矢部、狩野、五十嵐、岡田、各理事	
憲法	味岡理事	狩野、岡田、後藤、各理事	
教育	味岡理事	狩野理事	

国際活動	味岡理事（WVF全般）	柏木、矢部、清水、枩本、五十嵐、前川、各理事	
北方領土、歴史、伝統の継承、愛郷、愛国運動	後藤理事（全般）、吉田理事	矢部理事	
青少年部	大河内理事	矢部、後藤、吉田、各理事	
婦人部	岡田理事	味岡、前川、佐生、各理事	
企画、調査	味岡理事	古賀、福岡、矢部、枩本、後藤、岡田、野間、五十嵐、前川、各理事	
地域担当理事 北海道	五十嵐理事	矢部、藤代、各理事	
東北	香取理事	野間理事	
関東、甲、信、越、静	佐藤理事	大河内、黒田、各理事	
中部、北陸	味岡理事	狩野理事	
近畿	柏木理事	吉田理事	
中国	梅野理事	枩本理事	
四国	前川理事		
九州、沖縄	福岡理事	新井理事	
友好諸団体等 英霊にこたえる会	梅野理事	最上理事	
国会、郷友、議員懇談会等	福岡理事	松本（明）、野間、各理事	
二木会	味岡理事	矢部理事	
洗心会	野間理事		
隊友会、父兄会、防衛協会	新井理事	矢部理事	
日本を守る国民会議	後藤理事、吉田理事（関西）	矢部理事	
国防問題研究会	後藤理事	矢部、大河内、各理事	
摘要	一、新規の業務分担についてはその都度定める。 一、状況に応じ相互の支援を行なう。		

野島　一良選

神戸　泉　美冴

冬桜礼拝堂へ靴を脱ぐ

この句から受ける感じでは、そう大きな礼拝堂ではなさそうです。靴を脱いではいっていくのです。その礼拝堂の前あたりに冬桜が花をつけている。平明な句です。この句を二誦三誦していると、この礼拝堂をとりまく周囲の雰囲気が思いうかべられてきます。余韻があるのです。

藁塚にもたれてもみる旅の果

ちょっと古い言い方ですが、泰西の名画を見る感じをうけます。ルノアールは描いていないかな、などと。

山茶花やがらんと土蔵開かれて

薄ら日に風が哭き出す冬の湖

この作者の感覚は中七となって蕭条とした湖の冬景色を鑑賞させてくれる。

松江　大橋新太郎

元日を朝寝してをり帰郷の子

微笑ましい元日の一風景が、何の力みもなく描写されて好ましい。

元日の地震小さくありにけり

震度4位なのか、それよりも微震か、兎も角も元日に、あっ、地震だと気づいたのです。

マンションの共同門松堂々と

門松の意外に小さき新居かな

神奈川　仲手川藤吉

百尺の紅葉の滝と仰ぎけり

眼前の滝、ずっと高みへ、両側は紅葉いっぱい。『百尺』という表現で作者の心の昂ぶりが感じられる。奥の細道の日光の段の一節『滝有。岩洞の頂より飛流して百尺』が思い出されます。

秋灯下厚き辞苑の細字かな

実感が何気なくそのまま表現されている。何でもないようでこの下五は出てきません。この素朴さが引力となっているのでしょう。

里芋も甘藷も肥えて小六月

この肥えてはちょっと解り悪いのですが、それでいて、何だか共感が持てる不思議なニューアンスを持っている。

心温まる小春日です。

百歳の長寿の暖簾夷講

百歳の長寿の主人作の暖簾か、百年も続く老舗の暖簾が、少し不分明な句であるが、つい調子につられてとってしまう。未完成と思いますが、こんな風に大胆にぶっつけて作句してみることも一つのステップでしょう。

金沢　高桑　與三

暁の眠りを覚ます雪起し

掘りたての自然薯提げて友来たる

武家屋敷土塀に菰当て冬に入る

走り根が大石を抱き神の留守

東京　石井　清勝

枝のみの街路樹ならぶ十二月

激動の世の寒月と仰ぎけり

寒月の凜冽を仰いで世界の情勢を想いみている作者か。

亡き母に似たる羅漢も冬木中

松山　宵野さみえ

覚めけかの意識ゆさぶり冬の雷

ひとり行く比翼塚みち落葉雨

紅葉滝峠の茶屋の芋の餅

佐世保　青山宇宙

晩秋の岬につづく石蕗の径
月雲に入りし暗さの月見酒
人柄を示す出来栄え菊の鉢

岐阜　福井　利子

猫の目の時々細く冬暖し
冬暖し団地の屋根の重なりて
小春日の庭掃き終えて旅に出る

武蔵野　鶴間　俊子

箱根路や立冬の虹半円に
神宮橋宝くじ買ふ菊日和

神宮橋と菊日和はよく似合う。そこで宝くじを買うということも平俗を脱していますか。

庭柿に故郷しのぶ今日もかな

毎日必ず一度は眺めていられるから「今日もかな」なのです。

高砂　柳　穆水

悠々の大河見飽かず年の暮

師走とか年の暮といえば、兎角せわしないようなことを言おうとするのを、悠々の大河見飽かず、と。この大景を眺めている。作者の年の暮。はまことに悠揚迫らざるものである。

冬日背に眼くなりたる大公望

この句亦大らか。

不義理せし喪中のしらせ十二月

横須賀　大関　不撓

この岬の風筋変り冬に入る
紀子さんの笑顔美し小六月
凩や竜子(りゅうこ)の墓の空徳利

竜子は坂本竜馬の妻

千葉　岡田　正秋

小春日や軒先老の豆叩く
完熟の柿を選びて挽ぎにけり
枝葉つけ亡妻に供へし柿の色

松山　壷川　兵介

托鉢の僧列びゆく街師走
宝くじの夢買ふ人も街師走
車椅子も急ぎ過ぎ行く師走かな

岡山　三田　久代

柿熟るる故郷に来てをりにけり
池の面に晩秋の影平等院
紅葉狩りガイド方言織りまぜて

福島　秋葉　紅風

雪囲して遥かなり吾妻嶺
銀杏散る静かな朝の風見たり
山茶花の散る音もなく暮れゆけり

日立　内田　定夫

枯菊をひとりごちつつ焚いてをり

何を呟いているのか、独り言をいい乍ら枯菊を燃している。燃えつくまで可成り時がたつものです。煙ります。

五六戸の白壁部落大根干す

東京　久松　公郎

並木道木枯からから鳴ってゐる
過疎の村道が眩しく柿赤し

平和な山村の柿日和、道路が眩しいのです。

小牧　栗木　栄三

久々にうなづき交す忘年会

少し離れた席の友とか。

ともかくも師走八日は歴史の日

あの大戦が侵略か、防衛か。百年、二百年過ぎないとわからないことが多いのではないか。それは兎も角歴史の日であることは間違いない。

春日市　林　藤雄

故里の山ふところの冬構
師の叙勲訪へば笹子の庭に来て

富山　城山　暁舟

神通は一級河川浮寝鳥

暴れる川でもある神通川も冬を今静かに流れている。浮寝鳥が浮んでいる。

大胆な措辞「一級河川」にアクセントがあるというべきか。

茨城　高須　湖城

秋深し浦はわかさぎ漁の声

白魚の丸目そのまま躍り喰ひ

小さな丸い目だけが黒い。

仙台　若生　葛衢

法燈の障子明かりて雪降れり

大寺の法燈が点されて障子が明るい。

外には雪がしんしんと降っている。

福島　伊藤喜代子

味めしの匂いあふるるお取越

真宗の報恩講を地方では本山の正忌の前に行うこのお取越には地方地方によって趣向も違うのであろう。

み墓所を清めて献ぐ冬日和

玉野　三村　白柳

白鷺が冬田に下りて点となる

岐阜　松野　啓子

紅葉山単車を駐めて画家一人

久留米　執行みのる

時雨れきしこの峡海にひらけゆく

藤枝　渡辺　いつ

冬の朝素足にきつき坐禅かな

失名　氏

冬服に記念章がよく似合ふ

近詠　野島　一良

翁忌の湖北時雨れて見えにけり

胸像に松の韻きや枯芙蓉

×　×　×

投句締切　毎月十五日まで必着（翌々月号発表）。当季雑詠五句内外。葉書に判り易い字体で。

宛先　186東京都国立市東二―十二―十六

野島一良宛

森　武次選

前茨城　高須　行雄

柿赤し妻は手折りて皮をむき皿山盛に縁台に出す

前岐阜　松田　要二

宿願の地球一周遂に成る三十年の競歩実りて

兵庫　泉　美冴

明けやらぬ無人の駅に始発まち十二時集合の佐世保に向かふ

アトラクションの付髭めがねに湧く拍手佐世保の宿に草津節きく

○評・字を正確に。

長崎　荒木　尭巳（あけみ）

想ひ出す昭和天皇仁田峠数歩離れてお護りせしを

敬老日喜寿の祝と遠く住む子供達から電子レンヂを

○特攻の兵の写真のあどけなさなにも求めず命捧げて

長崎　大坪　善一

雨近きすすき野道を吾が行けば明けゆく空の月おぼろなり

ふる里の老いを慰め十年過ぐ中山芳輝（よしきみ）海艶やかに舞ひ居り

千葉　植弘　親孝

山鳩の雛を抱きゐる巣のまはり残して庭師枝下しする

思い切り枝下しせしわが狭庭ぱっと明るく空の広がる

屋根越しに見えし鈴なりの朱き柿今年はビ

ルの陰に沈めり
老夫婦地名探して開き見る子の地図帳に勉強の跡
○評・地図帳で地名さがしの喜び、小生も、杉野女子大卒の外孫、英語の実戦訓練の為、四月以降・オーストラリアに在り、SYDNY・FIJI・SUVA・NOUVELLE・CAEDONIE・NOUMEA等・オーストラリア・ニュージランド・オセアニアの地名に親しんで居ります。

神奈川　大関　民雄

天高く荘重華麗観艦式相模の海に堂々の陣
大相撲九州場所の優勝は押し一筋の大関小錦

神奈川　仲手川藤吉

天に立つ箱根群山むらさきに冴えかへりけり
ドライブの朝
たたなづく冬枯山の影映しダムは無限に蒼に鎮もる

福島　伊藤喜代子

日差よく背に温もりを感じつつ一日悠々狭庭の手入
吾妻おろし粉雪風巻く峠道を会議を目指して車ひた馳す
霎中北の国より訪れし行商の人にお茶をすすめぬ

千葉　岡田　正秋

親善の旅の記念に贈られし「夢」の掛軸苗剣秋しのぶ
香茶供へ蠟燭燃え尽く仏間にて亡妻の遺影と朝茶呑むなり

静岡　漆畑　邑

いつしかに砂州を占め居るゆりかもめ馴染める川の風物となる
潜きてはあらぬ方にて浮き遊ぶ鴨を知りにき山裾の池に
スタートの揃はぬ様もほほ笑ましはやもきざせる園児の闘志
○子の翼思ひてこの地にとどまりし白鷺の母今日も子と翔ぶ

岡山　三田　久代

北海道の牧草美事に育ちたりサイロ作りに夜の更くるまで

島根　長岡　利勝

年明けし裏田の畦の榛の木に日の出を待たず初雀鳴く

高知　中平　憲白

朝方は冷えびえとして高知にも本格的な冬の来たりぬ
暗きみち勤の人も学生も黙黙として家路を急ぐ
○公園の銀杏並木は黄金の花咲く如し師走の空に
空青く波おだやかに日をうけて眩ゆき沖をいさり舟ゆく

東京　石橋　松茂

○九州をオート踏破の長男は病室の母にスライド写せり
母へだと長男持参のスライドにナースはすかさずシーツ吊しぬ
入口に紙製のマイク置かれをり白血減りし娘と対面す

宮城　高橋　覚

木枯に並木の銀杏散りはてて有明の月枝にかかれり
散り敷ける落葉を一人踏み行けばリズムとなりて耳にさやけし
○しぐれても又しぐれ来る並木路そよ風に葉は音たてて散る

茨城　高須　行雄

自作物実りしままに荷造りて遠き吾が子に送る喜び

宮城　若生　活穂

パトカー先導マラソントップグループに伴走トラック大路走りく

岡山　三村　白柳

朝早く東天拝し国旗揚げ菊の佳節を吾は寿ぐ

福島　渡辺　ミツ

かさかさと明るき山路くだり来て苔のみどりに歩み止めぬ

東京　石井　清勝

菊花展そぞろ巡りて古きよき昭和の御代を噛みしむる今日

ベルリンの壁も除かれしみじみと新たなる世に思ひめぐらす

○情島日本を目指す難民船思ひ乱れてテレビに見入る

○やり残す事多きまま平成の元年も早や暮迫りくる

東京　勝又　正弘

今日もまた君の挨拶爽やかに命触れ合ふ楽しき職場

スカートをはきし船長美しく入学以来の夢実現す

石川　高桑　與三

シベリヤと外蒙古との境にて伐採作業せしみ冬おもほゆ

まるまると黄金色なす柚子浮ぶ湯舟に憩ふに薫漂ふ

広島　河野　洋菅

馬と我共に暮せし九十年心に残る思出の数

歳の瀬に馬を思ひて我悲し中支戦場残せし六千

我曾て西比利亜中支満州と馬にゆられし思出新た

高知　弘瀬清一郎

足摺の椿林のそこかしこつはぶきの花は咲きてゐにしが

高知　大畑　元宏

いたつきの妻をし思へば木枯の風音いたく枕辺に来し

高知　森下　剛

予科練の雄飛会碑のみ祭に還り群れ飛ぶ秋あかねはや

予科練の雄飛会碑のみ祭に斎場も狭に秋あかね飛ぶ

予科練の雄飛会碑のみ祭と知るや群れ飛ぶこの秋あかね

高知　古谷　進

水清く四季のめぐみの豊かなるわれは神州清潔の民

高知　別役　重具

野分たち杜も梢を秋に染めいつもの祭近づきにけり

高知　中田　憲秀

一筋の道つらぬくはかくばかり書籍の数にあらはれにけり

一筋の道つらぬきてゆきましきみとし想へば恋しくもあるか

◎選後小記

○今月は、三一名、一一七首のうち、六二首を採った。没・一名。

○現代短歌であるから、〈はも〉・〈かも〉等・古典用語の使用は、慎重に。平易な言葉で深い感動や美的感覚を表現すべく努力すること。

○原稿は毎月一回、十五日迄に直接左記へ記

〒214 川崎市多摩区西生田3—23—3

森　武次宛

選者詠　紀伊の海山を行く

我が祝詞（のりと）終るを待ちて居し如く白雲の上に

朝日は登る
この道を通りて都に行きしとふ妹背の山は
遠く霞めり
清姫が大蛇と化りて渡りけむ日高川いま蒼
蒼と淀む
藤白の坂越え石に泥みつつ牟婁の湯さして
只管歩む
くびられし有間皇子の通りしはこの道より
も悪しかりしなむ
嫣然と駅のホームに立つ人を拒みて吾は通
り過ぎたり
葡萄の樹の説教長く続きしがよろめき乍ら
めまひに耐ふる
花束の贈呈まではと耐へ居しが医師のかひ
なに遂に落ちたり
妻と子に腕をとられて行く闇路救命センタ
明明と在り
かかる滋味いづこに在りし病みて今短歌新
聞ゆっくりと読む

大森風来子選

東京都　石井　清勝

東西の次は南北消える番
世界の目ようやく三十八度線
鳥肌も見せず早くも水着ショー
迫力が減った野党へ寒い風
反乱へアキノの美貌どこいった

評＝一連の作品は今世界がそして日本が注目する事件ニュースをうまくとらえていて、とくに説明の要もなかろう。

広島市　坂井　愁山

―岡山紀行―

長い滝ごらんと猿に迎えられ（神庭の滝）
後の世に忠義桜で唄う宮（院庄作楽神社）
弾の跡生きた証の湯につかり（湯郷温泉）
殿偲ぶ閑谷学校の楷紅葉（国宝閑谷校）
釜鳴りの神事固唾を呑んで聞き

評＝吉備津神の釜鳴りの神事である。鬼退治の首をさらし首にしたところ、夜毎鬼がわめいて、附近の住民が寝られないので、この首を地下に埋め、鬼の寵愛を受けた阿曾女を侍らせて、鬼の怒りを鎮めたのが起源で、今は釜を焚きながらその音の大小によって吉凶を占う行事が今も続いているところである。私の句に「鬼の首祀り続けて吉備の国」がある。

佐世保市　荒木あけみ

世界地図色塗り変える日本円
小銭入れこの頃威張る一円貨
座布団を貰ってお歳がばれました
過疎一つ時賑い見せる秋祭り
栄与賞林檎うれしやひばり鳴く

千葉県　岡田　正秋

壁壊しバナナの味をかみしめる
ゼイゼイと言ってる国会春を待ち
日の目見し万年野党のあわてぶり
小綿が君が代聞いて鼻こすり
勲五等妻に内助の訪問着

福島県　五十嵐善一郎

美しい流れ淀みに模索する
紆余曲折流れる石の丸くなり
善人の流れを阻む黒い堰
民主化の流れペレストロイカに食いさがり

岐阜市　松野　啓子

一億の札束並べて村おこし
金星が月に隠れて子供めき
壁カーテン　ヤルタ　マルタも人の業
東西の格差は富みの差が見せる

島根県　山根　陟

口と腹合わぬ社党の安保論
豊作で減反続く米作り
審議拒否こんどは社党がされている
訪うたびに戦友偲んで香を焚く

岐阜市　松田　要二

入院の妻に教わるガスの栓
包丁の研ぎ方習う古稀の妻
老いし妻糠味噌漬けの腕の冴え
使うべき金に使われ老い進む

久留米市　執行　友好

街路樹も霜で傷つき血に染まる
マルタからヤルタ見直す両巨頭
世は無情陽の当らない木は枯れる
愛煙の果ての肺癌とは悲し

玉野市　三村　白柳

反乱軍大手を振って投降す
地中海荒れてマルタの波高し
真実の春がプラハへ蘇える
ベルリンの壁を民主の風が抜く

福岡市　川野　久男

平行も露骨になれば溝ができ
平凡がまだほど遠い社長業
人生の栄枯つまびく平家琵琶
平成よ昭和を曳いて駆け巡れ

仙台市　若生　勝緒

これみよがし象牙の印で気遅れし
パスポート転手古舞いの師走劇
茗荷汁折り返し点過ぎている
効能を信じて護符を抱きつづけ

東京都　勝又　正弘

山小屋のアフタースキーはウイスキー
消費税一円玉が見直され
餓鬼大将消えて大将復活し
スキーよりこたつを囲みウイスキー

札幌市　八木　柳雀

お正月昔話を持ち寄って
雪が降るあなたは来ない夏タイヤ
ひな壇に野党が登る消費税

岡山市　三田　久代

自由化で瑞穂の国の農家泣く
休耕田仕事がしたいと大欠伸
勝たせたい小錦優勝万々歳

神奈川県　内山　昇

東欧のドミノ現象熊逃げる
ベルリンの壁が砕けて土産品

（選後に）参院を通過した消費税は、衆院では全く審議もせず廃案となり、廃止か存続かをかけて衆院の解散、総選挙へと発展した。

巷には違反ポスターが張りめぐされ、いよいよ選挙による結着がつけられようとしている。今はただ国民の良識を信ずるばかりである。

投句は、はがきに五句、毎月十五日までに左記へ。

〒701－42岡山県邑久郡邑久町山手　選者宛

（郷友柳壇と明記）

御礼の辞

二月号は、十二月二十八日より一月七日迄、年末年始の休暇に成りますため、第一校の印刷は何としても休み開始前に印刷を了し、年末、年始にかけての校正作業実施の手順となる関係上、他の原稿同様俳壇、歌壇、柳壇の原稿についても毎月二十三日の原稿締め切りを繰り上げ二十日としてご協力をお願いしましたところ、各選者の先生にはこの無理なお願いに積極的なご協力頂き深謝の至りであります。

（編集部）

帝国陸軍編制総覧

元大本営参謀 井本熊男 監修
元防衛庁戦史編纂官 森松俊夫（前篇）
戦史研究家 外山 操（後篇）
上法快男 企画

●明治建軍以来の官衙、軍隊、学校、特務機関等を概説しその編制と主要人事を網羅
●戦闘序列を重視し、編制史や戦争史を時代区分に応じ表現する画期的な手法を採用
●常備団隊配備表、平時編制と戦時編制の区分図等豊富な図表・充実した別冊大「索引」

四六判上製皮装函入 七万二一〇〇円

〈2・26事件の証言〉
昭和史最大のドキュメント

二・二六事件 青春群像 須山幸雄著 2472円
二・二六の礎 安藤輝三 奥田鑛一郎著 1648円
西田税 二・二六への軌跡 須山幸雄著 2266円
一革新将校の半生と磯部浅一 佐々木二郎著 2472円
秘録 石原莞爾 横山臣平著 3605円
秘録 永田鉄山 刊行会編 3605円
評伝 真崎甚三郎 田崎末松著 2575円
橋本欣五郎一代 田々宮英太郎著 2884円
片倉参謀の証言 叛乱と鎮圧 片倉衷著 2266円
軍務局長 武藤章回想録 武藤章著 3090円

重版出来

陸海軍将官人事総覧 陸軍篇 海軍篇 全二巻

上法快男監修 陸軍篇（陸士四十五期迄） 18540円
外山 操 海軍篇（海兵五十八期迄） 15450円
全将官及び主要軍人の履歴を年月日迄収録した大資料！

芙蓉書房出版
〒113 東京都文京区弥生 2-1-1
☎813-4466(代) 振替東京6-351361

初回は切手300円で見本誌を送ります。

実物交換会会誌

旧日本陸軍・海軍 実物

軍装品

■出品500点以上■定価500円■10日発行■

旧軍隊関係の品物、何でも現金化します

代表者 浦田雅治

交換誌 檻楼（らんる） "S"係

〒710 岡山県倉敷市鶴形2-5-15
郵便振替口座 岡山6-11331

☎0864-22-9383

編集後記

◎北方領土の問題については、昨年十一月、ゴルバチョフの片腕とも云われる政治局員兼書記の「ヤコブレフ」氏が来日して海部総理、中山外相、小沢幹事長等と会談し、従来日本とソ連が夫々主張して来た事と別の第三の方策を研究したいと発言したが、その後はっきりした進展を見ず今日に至って居ります。

又空しく迎える「北方領土の日」日本としては、確固たる信念を以て「四島一轄、無条件返還」を期し、それが確実に実現する迄、常に強力に主張し続けてゆかねばならぬと痛感します。

◎これも大方の予想を越えて突如、東西対立の象徴とも云うべき「ベルリンの壁」が破られ、東西ドイツの関係に歴史的、重大な局面を展開しました事は、まだ、記憶に新しいことと思います。

これを契機として、欧州に於ては東西関係に重大な変化を生じ、今や、世界史が塗り替えられようとしていることも注目せねばなりません。

併し、日本を巡る極東の状勢は果してどうでしょうか。我が国の安全保障を考える場合、決して安心出来る状況ではないと考えられます。この立場に立って、元防衛庁長官山下元利先生の対談「デタントと日本の防衛」と京都外国語大学教授小谷豪治郎先生の「ソ連の軍事的脅威は存在する」を掲載しました。

我が国永遠の平和を子々孫々に残すため安全保障はどう在るべきかを、じっくり、検討、考究して頂きたいと念願します。

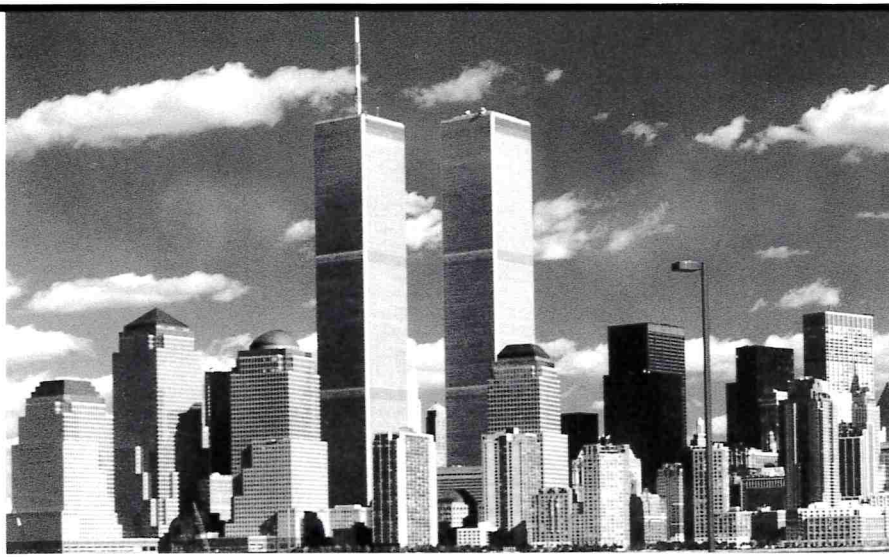
◎例年のことでありますが、昨年実施した「韓国研修旅行」参加の所感を多くの方々から寄せて頂きました。何れも大変貴重な内容でありますし、近くて遠い隣国の実情を具体的に知る必要と、日本の世相現況に鑑み、安全保障の在り方、英霊顕彰の実情等々正に他山の石として、大いに学ぶべき数々の事柄を示唆しておりますので、前号から四月号に亘って、貴重な写真と共に掲載し、ご参考に供する次第であります。

◎折角ご協力頂いた原稿が、原稿書きのルールに従っていなかったり、自己流の略字（国語辞典に乗っていない略字）、崩し書き、続け字等で書かれたものは、その儘印刷所に渡しても活字になりませんので、一々手直しを要し、全く無駄な労力を必要とし、猫の手も借りたい程の実情から、ほとほと困却します。

なお文章は成るべく短節とし、節の書き出しは必ず一字下げて書き、、、。は一字として一枠に入れ、又、誰が読んでもわかり易い平易簡明なものとし、難読の漢字にはカナをふる等ご協力をお願いします。

◎郷友誌のご購読申込みは振替えで。

郷　友　（第三十六巻第二号）（通巻第四百二十号）
発行兼編集人　赤羽根　澈（きよし）
発行所＝社団法人日本郷友連盟
〒一六〇　東京都新宿区若葉一丁目二十一番地
電話（341）四三八六
（353）二三四一・二三四二
毎月一回一日発行
定価・一部二百六十円（送料共）
振替口座・東京四―七一八七七
印刷所＝共同印刷株式会社
〒一一二東京都文京区小石川四の十四の十二
電話・案内台（817）二一一一



部品から部材へ、そして今、システムへ

40年前
1本の小さな釘が
始まりでした。

一本の小さな釘をつくることからスタートした当社は、以来、
各種の特殊釘、フックボルト、ジョイナーなど、建築用の金物メーカーとして、堅実に歩んで参りました。
建築工法が進歩し、材料の多様化・高グレード化が進む現在、
アルミ化粧材、笠木、システム天井、天井・間仕切下地などのビル用建材をはじめ、
体育館・アリーナ、OAフロア、集合住宅フロアなどシステムフロア、
また、工場・倉庫などのための換気製品、排煙装置、建築用シーリングにいたるまで、
建築分野のなかで、多岐にわたっています。
わたくし達は、これからも独自の技術と独創的なアイデアで、
21世紀の建築資材の研究・開発を進めます。

金属建材のパイオニア
三洋工業
本社：東京都江東区亀戸6－20－7　☎03(685)3452

TOSHO VISION

総合美を願って

TDL美容法がつくり出す外面の美しさ、健康的な生活から生まれる内面の美しさ、そして心の美しさを身につける知的な触れ合い—株式会社東照のハウス&ベレッツアクラブはそうした「総合美」をめざす女性のステージです。ここでは、「美」に関するあらゆる情報が毎日提供され、自由なコミュニケーションが楽しめます。

東京渋谷・南平台ミュゼ ドゥ ベレッツア

東照が提案する「総合美」のステージ

TOSHO GROUP

株式会社東照　本社：東京都渋谷区神宮前6-19-20 第15荒井ビル TEL.03-407-1241
株式会社マイクロデバイス　東京都港区芝浦4-16-36 住友芝浦ビル
株式会社総合美容医科学研究所　東京都渋谷区南平台町12-11 新第3荒井ビル
トーショー開発株式会社　東京都港区芝浦4-16-36 住友芝浦ビル
エスティックアクア株式会社　神奈川県横浜市泉区上飯田町2511
株式会社東照インストルメント　東京都文京区本郷3-29-11 セイル本郷ビル
株式会社インターメディックス・ジャパン　東京都渋谷区南平台町12-11 新第3荒井ビル
ミュゼ ドゥ ベレッツア　東京都渋谷区南平台町12-11 新第3荒井ビル

TOSHO
CORPORATION
TOKYO JAPAN